



# 黒死蝶



星野 澄華

written by Sumika Hoshino

## Prologue Night

---

そこは破壊と殺戮の過ぎ去った場所だった。

人々は皆、涙し、途方に暮れていた。何しろ、いままで生活してきた家が、街が、すべてが失われてしまったのだから。男達は少しでも使えそうなものを探し、崩れた家々の周りを魂の抜けたように徘徊している。女達はその足元で、瓦礫に埋まった我が子を見つけ出そうと、泣きながら手を動かしては傷を作っていた。

生き残った者は死者よりも少なく、彼らにさらなる不幸を運ぶかのように、立ち上がる黒煙の合間からカラスの騒がしい鳴き声が聞こえてくる。

そんな境地へ、その少女はやって来た。

金色の長い髪は、少女の背で流れるように揺れている。彼女の肌は内側から輝くようで、身につけている衣服はここらでは見かけることのない、一目で高価だとわかる代物だった。

少女はひとしきり辺りを見渡すと、周りで繰り広げられている惨状には目もくれずに歩を進めた。その歩調は、目的のものを見つけて心なしか早くなっている。

向かった先、ひときわ崩壊の激しい家のそば—燃えて黒ずんでいる柱が崩れれば、すぐに下敷きになるような場所—そこには、少年が仰向けになって転がっていた。目の焦点は合ってはおらず、両足は力なく投げ出されていた。着ているものは、先ほどの住人達より一層粗末な服だった。そして、首には奴隷の象徴である首輪がはめられており、その首の細さを際立たせている。体は煤にまみれ、あちこちが火傷のために赤くなっている。それでも、少年は生きていた。

少女は彼の近くに歩みを進めると、上から見下ろして尋ねた。

「貴方の名前は？」

華奢な外見とは異なり、凜とした声が少女の口から発された。少年はいきなり現れた少女に驚くことも視線を向けることもせずに、乾いて端の切れた唇を動かした。

「...名前は、ない」

「そう」

少女は大して気にした風でもなく、「付いてきなさい」と言って背を向けて再び来た道に戻り始めた。

—すべては“魔女狩り”の終わった後のことだった。

## 第1夜

昔のことを思い出して、ジェンスヴェルは顔をしかめた。眉をかすかに寄せただけなので、傍からはわかりにくい。しかし、彼にとっては思い出したくない過去の一つでもある。今こうして闇夜にその身を潜めているのにも大きな関係がある。

ジェンスヴェルは小さく息を漏らした。背を預けている樹木に軽い振動が伝わる。

今更昔のことを思い出しても、意味がない。ならば何故、そんな記憶が甦ったのだろうか。きっかけになるようなことは一つもなかったというのに。

自問を続けても、答えは出るはずもないと早々に思考を止めてしまった。今夜の客が来たというのもある。

樹の隣に聳え立つ、今は使われていない古びた警鐘塔に仕掛けてある集音機から、重い足音が聞こえてくる。

時はすでに真夜中。わざわざ塔に上ってくるのは客以外の何者でもない。何年も鐘が鳴らず、手入れもほとんどされずに蔦が這っている廃墟に来るのは。

頭上の枝にとまっていた闇の使いのごとき黒い鴉が、問いかけるように首をかしげた。ジェンスヴェルは軽く頷いて命令した。

「行け」

小さく鋭い声で囁くと、漆黒の鳥は夜の闇を縫って音も立てずに飛び立った。

『おい、何でも屋。いるのか？仕事を頼みたい』

聞こえてきたのは、男の声だった。言葉の端々に疲れがにじんでいる。仕事という部分で、それがまるで忌みものであるかのように低い声をさらに低くした。集音機からは返事を待つじれったさが伝わってくる。

ジェンスヴェルは上を見上げて、依頼者が誰なのかを確認すると手に持った送話機に話しかけた。

「パロデ・ソフェル＝ビリア公爵ですね。あなたのような人が私のような下賤な者を訪ねてくるとは意外です。貴方にとって私はむしろ目障りな存在では？」

明らかな皮肉だった。公爵がどこからともなく聞こえてきた声に驚き、そして唸るのが聞こえる。護衛は、と鐘楼に再び目をこらすと、公爵はただ一人で来たらしい。おそらく彼の独断でここに来たのだろう。

『そんなことはどうでもいい。仕事を頼めるのか、頼めないのか？』

湧き上がってくる怒りをどうにか抑えたのか、押し殺した声で聞いてくる。冷静な態度を崩さず、あくまで自分の立場は上だということを主張したいのだろう。だが町の最高責任者である彼が、わざわざ護衛もつけずによそ者の自分に頼みに来るようなことだ、断れば困るのは公爵の方だとすぐに分かった。

「もちろんお受けいたしますよ、公爵殿。私が受けられる内容であれば、の話ですが」

だが、ジェンスヴェルは答えた。とりあえずのところ、この客を断る理由が無いからだ。公爵が一級犯罪人である彼をこの街から消すために陥れようとしているのでなければ。

『聞いた通りに、詳細書と前金も持って来た。ここに置くだけでいいのか？』

「ええ。ですが、仕事内容については簡単に説明してもらえますか。まだ、受けると決めたわけではないので」

しばらく公爵は沈黙を保っていた。だが、意を決したのか話し始めた。

『あえて言わせてもらう。この仕事はおそらくお前以外、例えば我が自警団でも遂行は無理だろう。お前の腕を信用しているのでもない。だが、“あの事件”を聞く限り最善だと思うがためにこうして来たのだ』

一人で来たのはおそらく、自分の面目を保つため。簡単に予測が立つ。

『お前にしてもらいたいのは……』

そこで公爵は言葉を切り、走って来た人間がするように浅い呼吸を繰り返した。口にすることをためらっているのがわかる。

どうやら厄介事を持ち込まれたようだ、とジェンスヴェルは目を静かに閉じた。集音機は説明を再開した公爵の音声を忠実に拾ってくる。

『お前に頼みたいのは、町の外れにある廃屋に居座っている魔女の駆除だ』

言っただけで、落ち着かないような衣擦れの音がした。ジェンスヴェルさえ、嫌な響きに開いた瞳の鋭さが増した。

「...わかりました」

それでも興味がわいた。唯一自分が知る魔女とどう違うのだろうかと思ったのだ。

「お受けいたします。書類などは足元に置いて、お帰り下さい。成功後、お知らせいたします」

『た、頼む。時は一刻を争う！……もし、“魔女狩り”でもされたら……！』

公爵の声は先ほどと打って変わって恐怖に震えていた。しかし最後まで言い終わらずに――彼のプライドが途中で止めたのかもしれないが――荒々しく足を踏み鳴らして塔から去って行った。

## 第1夜

---

再び訪れた沈黙に飲み込まれそうになる。頼杖をして、ジェンスヴェルは思考するために再び瞼を閉じる。

何でも屋——そう公爵は言ったが、それは正確ではない。勝手に付けられた呼び名だ。実際大きな都市の路地裏で行われているような麻薬売買や、誰かの犯罪行為への加担は一切していない。前者はジェンスヴェルにその知識がないことや売る商品自体がないことなどが関係しているが、後者は顔を見せるために他人と組む気がないためだ。なぜなら、彼はまだ十四、五ほどにしか見えないのだ。顔が割れれば仕事は来なくなる。顔を露わにしないのは至極当然のことだ。正確な年齢は彼自身も知らないが、そのこと自体はどうでもいいことだと気にしていなかった。

そして、ジェンスヴェルの顔を見ることになるのは彼に殺される者のみだろう。今いる街、ラクラスは古風な雰囲気漂わせているが普通の町より大きいため、殺害依頼も少なからず入ってくる。そしてそれをジェンスヴェルは一人で遂行しているのだ。

切れ長の目を開き、しばし闇を睨む。そしてすっと立ち上がると、足場の枝を蹴って隣に聳える塔の窓へその細い体軀を滑り込ませた。

塔の内部はどこもかしこも夜という色に塗りつぶされ、目が慣れるということがないように思える。だが、生業によって闇の方がよく見えるようになっているジェンスヴェルにとってそんなことは取るに足らない。石の床に置かれた木箱に手をかけて蓋を開ける。澄んだ金属音が一瞬空気を震わせ、中身が目に入った。上には薄い書類、そして下には紙幣が押し込まれていた。前金にしては大層な額だ。公爵は金額によって彼が仕事を棄却することを恐れたのだろう。

しばらくそれらを見ていたジェンスヴェルの肩に、先ほど彼が入ってきた窓から侵入した鴉が止まった。ジェンスヴェルの顔に頭を擦り付ける。ジェンスヴェルはせかす鳥の首から、小型送話機を取り外した。この機械で彼は先刻のやり取りを行っていたのだ。鴉は公爵からは見えないよう、警鐘塔の屋根に隠れていた。そのため公爵はいきなり聞こえてきた彼の声に驚いたのだ。そして、ジェンスヴェルの耳には鈍く光る耳飾りのような受聴機が。この二つの機械は特殊な仕掛けにより、不自由なく会話をすることができる。ジェンスヴェルは依頼人とは常にこれを用いて契約を行っていた。

「先に帰っていい」

そう言うと鴉は一声鳴いて飛び立ち、間もなく明ける夜の静寂に溶け込んだ。

ジェンスヴェルは受聴機を耳から外し、しまい込みながら床に手をつけてしゃがみこんだ。そして資料を一読すると箱に戻し、それごと持ち上げて入ったのと反対の窓枠に足をかけた。一瞬の後に彼の姿は消えた。重力に身を任せて自由落下したのだ。目撃者がいれば息をのむか、悲鳴を上げていただろう。しかし、彼の体は地面に突撃する前に壁を蹴った反動で横にそれた。そして近くの民家の屋根を伝って移動していった。

太陽の片鱗が彼の眼を刺した。あと一刻もすれば、住民達が起き始める時間だ。

移動を続けながら、ジェンスヴェルは北に視線を向けた。背の高い草に覆われた小高い丘が見える。辛うじて細い線のような道が頂上まで伸びているのを見て取れる。それを鋭く睨むと、ジェンスヴェルは仕事を何時するか決定した。

——今宵。

早いうちがいい。そう思ってジェンスヴェルは朝日に包まれゆく街の中を駆け抜けた。

## 第2夜

---

その夜は、春にしては真冬のように冷え込んだ。吐く息がうすく曇って空気に溶け込んでいく。ジェンスヴェルを不機嫌にするには十分だった。

丘は人の手がほとんど入っていない地域で、早くも植物が自由に葉を茂らせていた。おかげで身を隠すのに不便はない。ジェンスヴェルは射るような視線を丘の頂上に向けた。そこには、一つの建物がぼつりと建っているのみだ。

依頼書によれば、建物は家ではなく、石造りの納屋であるということだった。家の方は木造だったために、大分昔に火災で焼け落ちたのだという。以来そこに住まうものはいない。はずだった。魔女がそこに居つくまでは。時折深夜に青や白の光が漏れてくるのを不審に思った公爵家の警備兵が足を運ぶと、魔女と思われる者を発見したのだという。命からがら戻った彼は震える声で公爵に報告をした。あの丘に魔女が住み着きました、我々に危害を加えるか、あるいは政府が勘付いて『魔女狩り』を行うのは時間の問題です、と。その報告を聞いた公爵の顔は蒼白になっただろう。先祖代々治めてきたこの街が、ただ魔女一人によって壊滅的な被害を受けることになるのだから。

しかし、公爵の権限で討伐隊を組んだとしても、魔女の力が明らかではないために、下手に刺激を与えれば街に被害が及ぶことにもなりかねない。また、政府に抹殺を頼んだとしても、『魔女狩り』を執行されれば周辺の地域は抹消されてしまう。

公爵は追い詰められてしまった。魔女が行動を起こしたらそれでおしまいだ。しかし、彼はある存在を知っていた。

街の危険分子、「何でも屋」ジェンスヴェルのことを――。

ジェンスヴェルは去年の寒さ厳しい冬にやって来た。そして彼の存在をこの街の住民皆に知らしめた。

彼は、住民に煙たがられる存在であったごろつき達を一晩で殺めた。そして街の裏通りに転がしたその骸の上に、「広告」を置いて行った。

――盗みたいもの、殺したいもの、人には言えない願望を持つ者は、依頼書と前金を持って西の警鐘塔に夜来られたし。その願い叶えて差し上げる。

噂は町中を巡り、知らぬ者はいなくなるほどだった。面白半分に塔へ入った者が突如鴉に襲われて恐れをなして逃げ帰ったという話もあれば、ある男が不審な死に方をしたのは夫の浮気に耐えられなくなった妻が彼に依頼したからだという話もあった。

かの公爵も、ジェンスヴェルを殺人の罪で捕縛しようと警備兵を数人警鐘塔へ配置したが、姿かたちも見えない彼を諦めるしかなかった。そのため昨夜彼が依頼に来た時にジェンスヴェルが真っ先に考えたのは、依頼にかこつけて彼を捕まえようと再び目論んだからではないかと思ったのだ。依頼の内容はそれと同じようなものかもしれなかったが。ジェンスヴェルが魔女に敗れば、公爵は問題を一つ解決できる。魔女の場合も同様だ。しかし、本音としては一挙両得の共倒れを願っているのだろう。

ある程度の時期が経って、今は彼を巡る話は下火になっている。しかし、依頼人は少なからず彼のもとに仕事を運んできていた。



## 第2夜

---

ジェンスヴェルは不機嫌だったが、寒さのほかにももう一つ理由があった。先に飛ばせた鴉が帰ってこないのだ。今度は送話機ではなく、視聴器を取り付けた。だが、問題の納屋の近くへ行ったと思った瞬間に音を立てて送られてくる映像が灰色一色に変わった。もはや望みは持てないだろう。

――本物だ。

納屋に近づくとつれてジェンスヴェルは気圧の違いを感じていた。この丘は小高いとはいえ、普通に考えて気圧の変化など気づかないような高度である。つまり魔女が力を発揮して何物も寄せ付けないようにしているのだろう。

丈の長い草に身を隠してもらいながら、納屋の裏へ回り込んだ。この距離では中は暗く塗りつぶされて、特に動くものはないように見える。が、さらに気圧変化は大きくなっていく。

鍛えられたジェンスヴェルの感覚は、これを本物の魔女だと確信していた。

気圧の変化は俗にいう魔力が辺り一面に流されているからだ。ジェンスヴェルのいる位置では空気が震えるほど魔力の濃度が高まっている。

魔女――それは人外の強大な力を有する者たちのことを指す。男も女も関係なく、禍々しい魔力を振るう者は魔女と呼ばれた。そして強すぎる力のために器である人間の精神は歪んでしまい、人とは共存不可能な存在として排除されてきた。

。

魔女には親が魔女である場合と、突発的に生まれる場合とがあるとされているが、詳しくは分かっていない。

昔は、魔女は生まれてすぐの赤ん坊の時期に空中を浮かぶなどして発見され、力の弱いうちに殺されてきた。しかし、十数年前あたりから、彼らはある程度育ってからその本領を発揮するようになった。そして被害が拡大し始めた十年前に、国は人間の脅威となった魔女を徹底的に抹殺することを決定した。それが『魔女狩り』である。『魔女狩り』は、魔女の住まう場所を穢れた土地として開発された兵器によって一斉射撃することを指す。そのため、周辺の地域は消し飛ばされる。

国民にとっても魔女は脅威であったが、『魔女狩り』も同様のものとなってしまった。魔女を逃さないよう、国は役人を各地に配置。魔女発見の通達があれば、攻撃を行った。大抵魔女は小さな町や村の近くに現れるので、犠牲少なく、かつ確実に魔女を仕留められると踏んだのだ。実際に魔女が倒れることもあったようだが、効果のほどはあまり上がっていないとの噂も流れている。そうであれば、理不尽な殺戮であり、魔女としていることは変わらないと異を唱える者はいたが、大半はそれ以外に魔女抹殺が達成できる術はないと、怯えながら自分たちの住むところに魔女が来ないことを祈っていたのだ。

しかし魔女はこの街にやって来た。

空にはあと数日で満月になろうという月が、煌めく星々に囲まれて冷え冷えとした輝きを地上に放っている。魔力のせいかわ、辺りには虫の鳴き声一つしない、ひどく奇妙な空間が広がっていた。ただ、ジェンスヴェルが足元の低草を踏む音が辛うじて彼の耳に届いていた。ジェンスヴェルはただ黙々と草むらをかき分けて目的地へと近づいていった。

### 第3夜

---

ジェンスヴェルは納屋の奥へ回り込んだ。窓枠に硝子は嵌まっておらず、ただ四方にそれらしき破片が鋭い切っ先を覗かせている。

しんとした中からは外と同じく物音はおろか、気配すらしない。しかし、ジェンスヴェルは獲物を逃す気はない。逆に捕まる気もなかった。呼吸もいつも仕事をする時と同じく、回数を減らして己の気配も断っている。

緊張はしていない。ただ、相手がどれほどの強さを秘めているのかは分かりかねる。魔力を流してはいるが、それ以上に力を持っていることも十分考えられる。油断をする気はないが、場合によっては――。

ジェンスヴェルはさらに距離を詰める。もう腕を伸ばせば窓枠に手をかけられる。というところで進行を止めた。静止。そして刹那の速さで彼の姿は掻き消えた。いや、跳んだのだ。警鐘塔に身をすべりこませた時とは比べ物にならない俊敏さで、ジェンスヴェルは納屋の奥に着地して短刀を構えた。着地の音すら空気を乱しはしなかった。相変わらずの静寂が彼を覆っている。

その静寂は今まさに破られようとしていた。ジェンスヴェルは標的の前に立った。

「あら。またお客様？今夜は尋ね人の多いこと」

鈴の音を転がすような、微笑と妖しさを含んだ声が彼に答えた。ジェンスヴェルは眉一つ動かさない。瞬きすることなく相手を見定めている。

「今晚は。はじめまして、黒衣の人。それとも…さようならなのかしら？貴方も私の命を狙う狩人なのかしら」

のんびりとした、甘い声を発するのは随分と若い喪服のドレスを纏った貴婦人だった。若く見えるといった方が正しいか。魔女はその長命さでも恐れられていた。

同じ闇の色を纏った両者は対峙した。すべてが黒く塗りつぶされているが、そんなことは優れた視力を持つジェンスヴェルには大したことではなかったし、魔女は身体能力を魔力で無意識のうちに高めているので彼と同様、あるいはそれ以上によく見えていた。

そして、納屋の中には血の匂いが漂っていた。ジェンスヴェルは匂いの元を魔女の手に見た。彼女は人間の首を鷲掴みにしていた。血はその人間から流れていた。顔は仰向き気味になっていてジェンスヴェルの方からは判別出来ない。しかし、ジェンスヴェルには何かが引っ掛かった。青年と思しきその人間に見覚えがあるような気がしたからだ。

「――…？」

怪訝な表情をしたジェンスヴェルに魔女が尋ねる。

「もしかしてお知り合い？この人を助けに来たのかしら」

だが、ジェンスヴェルは首を振る。

「いや。無関係だ」

その顔にはもう何の表情も読み取れない。

断言したジェンスヴェルを魔女は眺めて、そしてそのまま、意識のない青年を壁際に放り投げた。青年は呻くことも身を震わせることもなく床に転がった。もしかすると、すでに息絶えているのかもしれない。

魔女はにっこりと微笑んだ。それだけを見るなら、まるで聖母の慈悲深い微笑みを見るようである。

「さて。それじゃあ、始めましょうか？ 貴方は彼より強いのかしら。そうだったら嬉しいわ。最近は大人数ばかりで若い子は新鮮。楽しませて頂戴ね。…つまらなかったら町へ行くまでなのだけれど」

魔女の口の端が釣り上がった。聖女は消え去り、闇の生き物がそこに在る。

### 第3夜

---

魔女が最後の一言を言い終える前に、ジェンスヴェルは動いていた。納屋に入ったのと同じ速度で標的の首を刈り取ろうとする。だが、そこには当然魔女の姿はない。

少し横にずれて魔女はいた。相変わらず微笑を顔に浮かべている。そしてそこだけ紅い唇を開く。

「貴方…少し変な感じがするわ。何者なのか、聞いてもいい？」

「単なる殺し屋だ」

すげなく答えて再び攻撃に移る。さらに速度を上げて魔女の背後へ迫り、その細い首に短刀を突き刺そうとした。が、そこで何かが月の光に反射して鋼のように光った。寸時にジェンスヴェルは動きを止めた。ぎりぎりのところで踏みとどまり、後ろへ素早く跳び退く。

「……っ」

「あら、残念」

空中に銀色の太い針が魔女の周りに幾つも浮いていた。それらは同じ色をした糸で繋がれ、彼女の身を守ると同時にジェンスヴェルを牽制していた。

「さっきの人はこれで幾らか傷を負わせたのに」

魔女は楽しくて仕方がない、という風に猫のように目を細めた。そう、狙われたのは魔女であると同時にジェンスヴェル。あと一步踏み込んでいれば、その身を無数の針が突き刺し、細い糸に刻まれていたであろう。

近距離だけでなく、遠距離でも十分戦えるその”武器”を前にして、ジェンスヴェルは距離を取ろうともう半歩下がった。それが間違いだった。

まず魔女が消えた。その動きを察知した瞬間、下から風を感じた。

次の瞬間、ジェンスヴェルは魔女の手によって壁に激しく打ちつけられた。衝撃に目の前が瞬く。魔力で高められたその体力は、女性の細腕に大の男の腕力を乗せることも可能にする。

頭が割れる程の強い痛みに、体が数瞬いうことを聞かない。その後に体中を襲う鋭い熱に、針も時を同じくして自分を攻撃していたのだと知る。

ジェンスヴェルは、先の青年と同じように首を掴まれ、血を流していた。しかし、まだ意識はある。彼の顔を覗き込んだ魔女が、笑みを深くする。そして彼女はジェンスヴェルが今だ持っている短刀に指を添えた。魔力が注がれて、刀身が粉々に散る。欠片はジェンスヴェルの血液と共に落下していった。

「もう終わり？」

魔女は囁く。

## 第4夜

---

「残念ね。さっきの人よりはまだ良い方かしら？でも、もっと楽しみたかったわ。これじゃあ、街の方へ行って気を収めるしかなさそうね」

魔女は首をかしげて、「もう聞こえてはいないかしら」と呟いた。しかし、ジェンスヴェルがまだ息をしていることを確かめると、指に力を込めた。

「死になさい、若き狩人。私を楽しませてくれないのなら」

ジェンスヴェルの血に濡れた唇が引きつるように動く。魔女はそれを見逃さない。問いかける。

「なあに？最期に言い残したいことがあるの？命乞いは聞かないわ」

出てきた声は、潰されかけている咽喉からまともに出てこなかった。ただ、乾いた風のように音を立てただけだった。魔女は、彼の言葉を聞き取ろうとして顔を近づける。

死ぬものか。

ジェンスヴェルは右足の踵を背後の壁に叩きつけ、非常用の仕込み刃の切っ先を出した。魔女が動く前に足を蹴り上げ、今度こそ、ジェンスヴェルは武器を彼女の身体へ深々と刺し、切り裂いた。

血飛沫が散った。

真紅の血を浴びてもジェンスヴェルは止まらずに腰の革鞘から、予備の短刀を引き抜き、倒れかけている魔女の胸に――まるで吸血鬼に杭を打つように――突き立てた。

倒れた魔女の傷口から、血液が魔力と共に流れ出る。

額を切って渗む視界でジェンスヴェルが近寄ると、魔女は彼を見上げて観念したように微笑を浮かべた。そして口から大量の血を吐く。

魔女といえども、心臓を深く傷つけられては助からない。

ジェンスヴェルも満身創痍だった。何より、失血のために立っているのがやっつである。

「……見事なものね。すぐに殺してあげれば……よかったわ。こんな手に出るなんてね」

咳き込みながら魔女は言葉を紡ぐ。

「ずっと生きてきて、……最期は綺麗な子に命を奪ってもらうのも悪くはないかしら。……少なくとも、私の両親よりはずっとましね……」

意識が混濁してきたのか、視線の焦点が合わなくなっていく。だが――ふと魔女は何かに気づいたように瞳に輝きを取り戻した。そしてジェンスヴェルを軽い驚きと共に見つめる。

「貴方……変な感じがすると思ったら……」

ジェンスヴェルは彼女の声を遮った。

「それ以上口にするな」

強く言い放ったジェンスヴェルに、魔女は理解したように瞬きをした。そのまま、瞳を閉じて長く息を吐いた。

「残念ね……」

彼女が何に対してそういったのかは、ジェンスヴェルには分からなかった。ただ分かっているのは、彼は依頼を果たしたということである。もちろん魔女はまだ死んではいない。血と魔力とを失って緩やかに死の淵に沈んでいくのだ。

ジェンスヴェルはそんな彼女の姿をしばらく見つめていたが、ふいと視線を外して離れた。一つ、確認することがあったからだ。痛む身体で壁際に膝をつく。切られた額から流れる血をぬぐうと、前に転がる青年をよく見た。血まみれの青年は一般の男よりは細めの体つきをしていた。その顔を見て、それが誰だか分かると、ジェンスヴェルは残りの力で止めを刺そうとするのを必死にこらえなければならなかった。

青年はまだ生きていた。かすかに上下する胸がそれを証明している。

はじめに見た時に何故引っ掛かりを覚えたのかもわかった。

青年はジェンスヴェルの仕事仲間だった。そして彼が所属する組織の中で最も毛嫌いしている人間だった。

## 第4夜

---

ジェンスヴェルは床に着けた手に力を込めた。このまま、見殺しにしようとすればできる。青年は、このまま放っておけばそのうちに魔女と同じく死への道を辿るだろう。

だが、何故彼がこの街にやって来たのかが不可解だった。青年は彼がこの街で仕事を行っているのを知っているはずであるし、組織では総長を除いて各自の仕事内容に首を突っ込むのは禁止されていた。

なら何故。

考えられるのは、彼個人の用か緊急の招集ぐらいである。しかし、前者は考えにくい。彼もジェンスヴェルが自分のことを好いていないと分かっている、この街には近づかないようにしていたはずだからだ。

青年に応急処置を施す。とにかく彼には事情を話してもらわないうちに死んでもらっては困る。ジェンスヴェルは息を吐いて、壁に身体を預けた。

夜明けにはまだ時間がある。それまでにとりあえず休まなければ、青年を街まで運ぶのは難しい。ジェンスヴェル自身は、負った傷のほとんどが傷口は小さいので既に出血は止まっている。

ジェンスヴェルは目を閉じた。



## 第5夜

---

夜が明けた。昨夜の寒さのせい、街には霧がかかって視界を塞いでいた。

こんな時に限って……と毒づきたい気分を抑え込んで、ジェンスヴェルは自分よりもかなり重い青年を背に負ってまだ目覚めない街の中を歩いていた。

青年はジェンスヴェルが休みを終えても意識が回復しなかった。ジェンスヴェルより数倍酷い傷のために、無理矢理起こして歩かせるわけにもいかない。背負った青年の靴は、二人の背が釣り合わないが故に石畳の道にぶつかってばかりいた。

青年を背負って丘を下り、街を歩くのは負傷した身には重労働だった。傷口が開かないだけ幸いである。

何とか街で評判のある医者の家へ着くことができた。

青年をずりおろして戸口に寄りかからせると、ジェンスヴェルは戸口を数回強く叩いてその場から去った。曲がり角で振り返ると、霧に包まれて寝間着姿の太った医師が青年を見つけて慌てて妻を呼んでいるのがかすかに見えた。ジェンスヴェルは前に向き直ると、自分の身体を十分休ませるために足を速めた。その後には公爵への依頼完了報告を行い、残りの金額を支払ってもらわなければならない。

青年のことはある程度回復するであろう数日後にでも迎えに行くつもりだった。

『ほ、本当か!?!』

公爵は興奮した声を出した。ジェンスヴェルが彼の顔を見ることができれば、目をむいて動揺する彼の姿を見ることができただろう。

場所は再び警鐘塔。依頼時となんら変わらない構図である。ジェンスヴェルは帰還した翌日の夕刻に公爵の屋敷へ忍び込んで、公爵が一人きりになるわずかな隙を狙って彼に依頼遂行を伝えた。そして今宵、残りの金額を用意して警鐘塔へ来るように告げた。その時、もちろんジェンスヴェルは姿を見せなかったため、公爵は今と同じように驚きの声を発して侍従に怪しまれていた。

「ええ、お疑いになるのであれば彼女の首でも持ってきましょうか」

何の感情も込めないままの声を送話機に送り込むと、公爵は恐怖のあまり上ずった声を出した。

『そ、そんなものはいらんっ！あんな邪悪なものは捨て置くのがふさわしいのだからな！』

「そうですか、ではその場に依頼料金を置いてお立ち去りください。……それと、周りには警備兵も連れて帰ってくださいますか」

ジェンスヴェルがそう言うと、今度こそ公爵は悲鳴を上げた。さらにジェンスヴェルは冷たく言い放つ。

「私の言っている意味はお分かりになるはずですよ、ソフェル公爵。街の異分子をこの際だからと排除しようとするのはいいですが、もっとご自分の身の安全を考えたらどうですか。私は貴方に指一本触れずに殺害できます。……どうしますか？」

公爵は咽喉からおかしな音を出して黙ってしまう。彼の上ってきた塔内部の階段や、塔の周辺

には少なからぬ兵達が出た。それだけ張りつめた空気に気づくなという方がジェンスヴェルには難しかった。公爵は、やはり街の異物を取り除かんと契約不履行を図ったのである。

「そういえば、もう一つお伝えしたいことがあるのですが」

一旦言葉を切ってジェンスヴェルは続けた。

## 第5夜

---

「夕刻、貴方の屋敷に失礼した際、私が何をしたと思いますか？」

『な、なんだ、脅すつもりか！』

おそらく公爵の額には脂汗が浮いているだろう。そう感じ取れるほどに、彼は動揺していた。

「公爵殿が契約書通りの金額をお支払いされるのであれば、何も起こりません」

公爵はさらに黙りこくった。しばらく夜の沈黙が続き、ジェンスヴェルが口を開きかけた時、公爵はようやく声を絞り出した。

『分かった。金はここに置いておく。警備兵も下がらせる。これでいいか？』

ジェンスヴェルは公爵がその言葉通りに動くように、警告を口にした。

「ええ、その言葉に偽りがなければ、公爵邸が燃え上がることはありません」

息をのむ音が受聴機から聞こえてくる。

『……何をした！』

「私が何者か、お忘れではありませんか、公爵。爆薬を屋敷中に仕掛けることなど造作もないことです。使うか使わないかはあなた次第ですが」

呻き声が聞こえてくる。公爵は声も出せないようだった。

『……本当にお前に手は出さない。金輪際、お前とは関わり合いにならない』

その後に聞こえてきた声は、かすれてまるで呪文のようだった。

『金はここに置いておく。ご苦労だった』

そして公爵は苛立ちまぎれに足音高く去って行った。

ジェンスヴェルは木に背を預けたまま塔を見上げた。満月が塔の先端に貫かれている。去っていく公爵を追って彼の身辺を守る警備兵がたてる金属音が静かな夜をかき乱し、じきにそれも遠くに聞こえるだけになった。辺りに人の気配もない。

冷えた風が枝を揺らし、ざわりと葉が騒いだ。



## 第6夜

---

何事もなく依頼料を回収したさらに翌日、ジェンスヴェルは警鐘塔には向かわなかった。眉をしかめ、気の進まない様子で負傷した青年を預けた医師のもとへ足を運んでいたからだ。

到着すると、診療所には当然明かりは見えなかった。

青年がジェンスヴェルが足を向けるまで姿を現さなかったことを考えると、今も昏睡状態である可能性は高い。その場合、無理にでもたたき起こして用件を聞きだそうと思っていた。もし目覚めない、あるいは治療の甲斐なく死んでいるのであれば、組織に直接赴けば良い。

しかし、事態はジェンスヴェルの望んだようには進まなかった。彼の眼は診察室と思しき部屋の縦長窓から黒い影が出てくるのを捉えた。

包帯だらけだが、あの青年であることは間違いなかった。

青年の方もジェンスヴェルに気づいて片腕を上げかけたが、悲鳴を上げて庭に転がり落ちた。二人の間には塀があるため、ジェンスヴェルの視界から青年の姿が消えた。冷えた視線を向けるジェンスヴェルに対して、青年は笑いながら土を払って起き上がった。共に落下した自分の荷物を肩にかけると、塀に手をかけて痛む体を庇いつつ路地に着地した。

「久しぶりだね、”黒死蝶”ジェンスヴェル」

それまで無表情に青年を眺めていたジェンスヴェルの顔が、久しく聞かなかった字名を聞いてわずかに強張った。そのまま体の向きを変えて町の外へ向かっていく。

「あ、ちょっと、待って！」

青年が慌てた声をだして後ろをついてくる。

「無駄な挨拶をしている場合か。この街に来た用件はなんだ」

敵意を隠そうともしないジェンスヴェルに、青年はため息をついて答える。

「緊急招集だけど……。君、もうぼ…俺がここに来たのがなんでか分かってたんじゃないの？この路地、街から出る道だろ？」

「”妖演馬”ヴァンルス、お前がわざわざ俺の仕事場に来た時点で考えられることは限られてくる。……お前が魔女に襲われさえしなければもっと早くに出立できたはずだがな」

ヴァンルスと呼ばれた青年はジェンスヴェルの言葉に首をかしげた。茶色がかった金髪がそれに合わせて揺れる。

「魔女って……君、あそこにいたのか？」

「それが恩人に対する口のきき方か、ヴァンルス」

「え……」

隣に並んだヴァンルスを、一層鋭く睨むとジェンスヴェルは彼に重症の彼を医師まで運んだことを簡潔に話した。

「それはどうも……。でも意外だなあ、君が仲間を助けるなんて。誰彼かまわず捨てていくと思ってたけど……。実際魔女とはいえ、綺麗な女性を殺せるわけだし」

「魔女は魔女だ。それにお前を仲間だと思ったことは一度もない」

「うわ、酷いな。僕……じゃなかった、俺だって任務携えて来てんのに」

ヴァンルスの反論に、ジェンスヴェルは瞳を細めて彼を射抜く。

「それが分かっていたからあえて見殺しにしなっただけのことだ。そうでなければ一思いに止めを刺していたのだがな」

そう聞いて、ヴァンルスの顔から血の気が引いた。出血のために青白い肌が白さを増す。

## 第6夜

---

「全く……相変わらずだね、君は。とりあえず伝えるように言われたことを言うと、なんか大規模な仕事が入ったからできるだけ少数精鋭で行くために実力があるものを呼び戻してるんだって。詳しいことは戻ってから全員に伝えるって言ってたから、まだ猶予はあるんじゃないかな。仕事があるなら早々に片付けて来いって言ってたけど……ところで、特にそれ以外の荷物とかないの？」

ヴァンルスはジェンスヴェルが一つだけ持つ大きめの皮袋に目を向けて言った。中には最低限の物品と依頼者からの金品が入っている。

「ない」

「……じゃあ、戻りますか、われらが本部”メルヴェール”に」

月が雲に隠され、二人の姿は塗りつぶされた。再び月が地上に光を投げかけた時、そこで動くものは皆無だった。

## 第7夜

---

「もう限界だよ、ジェンスヴェル！」

白い花が咲き誇る樹の下を通り過ぎたところで、ついにヴァンルスは音を上げた。

「そろそろ休まないと身が持たないって。一回休憩させてくれよ。この数日、歩きっぱなしじゃないか」

ジェンスヴェルは少しだけ速度を緩めると、後ろの連れを振り返って無情に言い放った。

「まだだ、日が沈むまでは歩く。それまで我慢しろ」

「ほんの少しでいいから！せめて座って水を飲むぐらいいいだろ？……それにほら、俺怪我人だし」

完全に足を止めて、ジェンスヴェルは五月蠅い連れにため息交じりに言った。

「早くしろ」

ヴァンルスはそれを聞いて、急いで腰を下ろすと荷物から水入れを探し始めた。ジェンスヴェルは離れたところに一人佇んでいる。

強い風が森の中を駆け抜け、木の枝を揺らすと共に、ジェンスヴェルの黒い外套を翻させた。

それを見て、ヴァンルスは彼の字名である”黒死蝶”を思い出した。彼の今の姿はまさにそうだった。美しい黒を纏い、死を運ぶ蝶。恐れと共に人を惹きつける。

本人はヴァンルスの考えていることなど知らずに、風の中で組織がある方角を見つめている。

思考を中断して、ヴァンルスは少し前に川で汲んだ水で咽喉を潤した。

「それにしても、よく疲れないね。……俺の怪我を抜きにしても、もう三日はこうして森の中を歩き詰めなのに」

ジェンスヴェルはゆっくりと首をヴァンルスに向けると、特に感情も込めずに答えた。

「お前ほど軟弱でないだけだ。そんな軽口が叩けるようなら、行くぞ」

早くもヴァンルスはこの旅に嫌気がさしていた。怪我が痛むのは自分の落ち度だとしても、ジェンスヴェルと二人きりで歩くのは辛いものがあった。下手をすると本当において行かれそうで怖い。本音を言えばそれでも良かったのだが、ジェンスヴェルと同じくらい怖いという噂を持ち、かつ得体の知れない総長がジェンスヴェルだけ返そうものなら自分をどうするか恐ろしかった。ヴァンルスが与えられた仕事には、ジェンスヴェルに召集を伝えることだけではなく、共に連れてくることも含まれていた。総長の真意は分からないが、そういうこともあってヴァンルスは泣き言を言いつつもジェンスヴェルについてきているのだった。

しかし、心の中は不満だらけだった。組織で総長を除けば最強と名高いジェンスヴェルに対する憧れが最初にあったのだが、旅路の上でそんなことは忘れた方が良くさえ感じ始めていた。

なんで俺がこんな役目を……！というヴァンルスの心の叫びは誰にも届くことなく消える。

## 第7夜

---

「ここでいいだろう」

二人が立ち止り、本日の寝床を決めたのは太陽が沈んでからかなり経った頃だった。厚い雲が出てきたのか、月は暗い空に現れず、辺りは漆黒に包まれていた。それでも暗闇の中で目が慣れると、ある程度は認識できるようになってくる。二人は木々が距離を置いて生えている場所に来ていた。

「やっと寝られる……」

息も絶え絶えにヴァンルスが言うと、顔色を全く変えないジェンスヴェルが「朝まで仮眠だ、日が昇ったらすぐに出発する」と告げた。その言葉にヴァンルスは少なからず驚いた。この数日、夜に休んでも日も昇らないうちから歩きだしていたのだ。夜明けまで寝られるとは有り難い。「君もやっぱり疲れてるんじゃないの？」

と聞いたが、ジェンスヴェルの冷たい視線に肩を竦めるだけに終わった。

「見張りはいいのかい」

「起きていたければ、まだ歩くが？」

そう答えられてヴァンルスは力の限り首を振った。せっかく前日よりも長く寝られるというのに、自分の失言で貴重な睡眠時間を失いたくはなかった。

「見張りなど必要ないだろう。何か近づけばすぐに気付く」

それだけ言うと、ジェンスヴェルは外套に身を包むと背中を木の幹に預けて目を閉じた。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

ヴァンルスも自分の荷物を枕にして下草の上に寝転がった。疲労と傷のせいですぐに睡魔が襲ってくる。意識がなくなるのにそう時間はかからなかった。

せっかくの睡眠が破られたのは、寝に入ってしばらくしてからだった。寝る前と辺りは少しも変わらず、少しだけ虫の音が騒がしくなっているような気がするだけだ。時折、木々の間を縫って梟の鳴く声が聞こえる。

「……腹、減ったな」

だるい体を起こしながら、荷物を漁って残りわずかな食料を取り出した。ジェンスヴェルのいる街に長く立ち寄れなかったため、組織から持ってきた食べ物しか持っていない。水はあちこちの川や泉から得ることができたが、春先では植物は芽吹き、花咲かすのに忙しく、大した物は採れない。

「……何時食べてるんだろう」

ヴァンルスが言ったのは、ジェンスヴェルのことである。彼はヴァンルスの思い出す限り、ろくなものを食べていない。たまに水を飲むが、それ以外に口を開くのは最低限のことを話すときだけだ。

思い起こせば様々な疑問がわいてくる。何故その細い体躯で疲れないのか、何故何も食べずにふらつくことさえしないのか、何故……まだ少年であるのに組織の中心的存在として君臨しているのか。

ヴァンルスは無言のまま顎に手を当てた。おそらく眠っているジェンスヴェルを観察する。考え込んだまま水を飲もうとして、革の容器がすでに空である音に気付く。ため息をついて立ち上がった。

ヴァンルスが水を汲んで戻ってきた時、わずかに月が雲間から光をこぼし、寝床はさながら小さな野外劇場のようだった。その中にジェンスヴェルが唯一の登場人物として、木にもたれかかったまま俯いている。その頬にも月光があたり、彼の白い肌は青みを帯びて、まるでこの世の者ではないようだった。

そこへわずかに漂ってきた獣の匂いが、幻想的な空間に見とれていたヴァンルスを実際に引き戻した。匂いは強くなってくる。

野兎だったら捕まえて食用に……と考えたが、これは明らかに肉食獣特有の獣臭である。

「……」

辺りを見回す。そのうち、ジェンスヴェルのいる場所の後ろから微かに茂みを揺らす音が聞こえてきた。ジェンスヴェルは起きているのかいないのか、少しも体を動かさない。

獣が姿を現した。正体は数匹の野犬だった。飼いならされた犬よりも体つきは大きい、勝てない相手ではない。彼らは静かにジェンスヴェルを取り囲むと、匂いを嗅ぎ始めた。ヴァンルスは気が気でない。

――そして。

「……ジェンスヴェルっ！」

## 第8夜

---

叫び声が口をついて出た。野犬がジェンスヴェルの身体を引き倒したのだ。今にも噛付きそうに歯をむき出したところに、駆け寄ったヴァンルスが蹴りを入れる。

「おいっ、ジェンスヴェル！」

ジェンスヴェルは地面に横たわったまま微塵も起き上げる気配がない。野犬に襲われているという事実よりも、そのことの方がヴァンルスを不気味にさせた。

襲いかかってきた一匹に掌底を打ち込む。相手もよほど空腹なのか、諦めが悪い。唸りながら腕や足に歯を立てようとしてくる。

「……くそっ」

野犬たちが離れた一瞬で仕事道具の短弓に頭数分の矢をつがえると、連射した。犬の悲鳴が響く。

ヴァンルスの放った矢は全て獲物に当たった。野犬たちは地に伏せ、痙攣してそのうち動かなくなかった。それを見るヴァンルスの瞳は、この時ばかりは殺人者特有の冷たい光を放っていた。

「……ジェンスヴェル？」

体を向き直らせて、ヴァンルスは未だ目覚めないジェンスヴェルのそばに膝をついた。ジェンスヴェルは先程ヴァンルスが感じたように、死人さながらに瞼を閉じていた。不安になったヴァンルスが心音を確認めると、通常よりは遅いが、安定した速度で心臓は脈打っていた。呼吸も微かながらしているようである。

しかし、ジェンスヴェルのあの言いようでは、ヴァンルスが起き上がった時にすでに目覚めていてもおかしくない。何より、職業柄熟睡するようなこともない。ジェンスヴェルの様子は、熟睡というよりも昏睡状態に陥っているかのようだ。

どうしたものかと悩むヴァンルスに、ジェンスヴェルの肩口がわずかにはだけているのが目に入った。おそらく野犬に襲われた時になったのだろう。

「――……え」

ヴァンルスは目を驚きに見開いた。何故なら、その服に隠れるようにして鮮やかな赤色が見えたからだ。それは傷跡のように見えた。

しばし逡巡したヴァンルスは、ジェンスヴェルの服に手をかけた。彼が羽織っていた外套は倒れた際にずり落ちていた。

服の前を開くと、傷だらけの身体が露わになった。ヴァンルスは息を飲む。しかし、そのどれもが治りかけている。その傷口は、ヴァンルスが魔女に受けたものとよく似ていた。治りは彼の方が早いようだったが。

「……さすがの”黒死蝶”も魔女には一筋縄ではいかなかったのか」

だが、肩口に走る傷痕は大分古いものに見える。見える範囲から考えると、背中を斜めに横切って腰まで到達しているのではないかと思われる。

ヴァンルスはジェンスヴェルの服を元通りに戻した。さすがに俯せにして傷の全貌を拝む勇氣はない。今でも起きたら殺されると思って、冷や汗をかいているのだ。

そんなヴァンルスの懸念をよそに、ジェンスヴェルは眠り続けていた。

その後は森に住まう獣に襲われることもなかった。ヴァンルスは野犬の死体を遠くへ運び、ひとまず大事はなさそうなジェンスヴェルを元の位置に直して、浅い眠りについた。

## 第8夜

---

「……おい、起きろ。出発するぞ」

いつの間にか日は昇り、ヴァンルスはジェンスヴェルに起こされていた。覚醒するのに数瞬を要してから、昨夜のことを思い出したヴァンルスは安心してよいのか怖がればいいのか分からずに顔を白黒させていた。何か言おうと思うのだが、言葉が出てこない。

そんなヴァンルスに怪訝な表情をすると、夜での様子を影にも出さないジェンスヴェルは荷物を取ってきて彼を急かした。

——もういっそ昨夜のことは夢だとしてしまおうかと思ったヴァンルスだが、水分補給の時にジェンスヴェルの目を盗んで見た矢の数は野犬の頭数分なくなっていた。とりあえずのところ、この秘密は墓場まで持っていくしかない。下手にジェンスヴェルに話せば、墓場に行くのが早まるのは必至であるに違いないからだ。

後しばらくで組織に辿り着くというところで雲が空を覆い、急な雨が森を洗った。しばらくは枝葉にさえぎられて雨粒はほとんど落ちてはこなかったが、雨が止み、空に再び青みが戻るころには伝い降りる雫によって二人はびしょ濡れになった。ジェンスヴェルはすでに外套を荷物の中にしまっていた。

もうそろそろ着いても良い頃になって、ヴァンルスは遅れ始めた。雨によって体力を奪われているのだが、彼とほとんど変わらない状態であるはずのジェンスヴェルはあえぐヴァンルスの先を黙々と進んでいた。

その足が急に止まったのは、ヴァンルスが休憩を請おうとした時だった。

「着いたぞ」

ヴァンルスを振り返って、疲労困憊の様子を見てジェンスヴェルは呆れ顔になった。表情自体はあまり変わらなかったが、間違いなく呆れていると感じたヴァンルスにはそう見えた。

ジェンスヴェルが止まったその先には、何年も使われていないような屋敷が建っていた。おそらく建てられて間もなくの頃はかなり立派だったのだろうと思わせる造りだったが、風雨に晒されてただの廃屋と化していた。屋敷と門には蔦が這い、壁にはひび割れが縦横無尽に走っていた。

庭であったはずの空間に足を踏み入れた二人は、屋敷の中には入らず、外側を回るように歩を進めた。向かう先には涸れきった井戸と、雑草の生えた花壇がある。

疲れたヴァンルスは、ジェンスヴェルに任せた。

ジェンスヴェルは古い井戸の前に身をかがめると、一部の煉瓦を外して手に持つと、ヴァンルスの待つ花壇に戻り、その欠けた部分に煉瓦をあてがった。花壇が音もなく横に滑り、苔に覆われた階段が二人の前に現れる。ヴァンルスはすぐに階段を降り始め、ジェンスヴェルは煉瓦を元に戻すと、足を速めて先の見えない階段に身体を滑り込ませた。その直後に花壇は元に戻り、湿気を含む闇に包まれた中で二人は歩き続けた。そのうちに地面は平らになり、人がすれ違えるくらいの広さがある通路が続いていた。

そして二人は止まった。行き止まりである。しかし慌てることなく、今度は先頭のヴァンルスが左手の壁の下を押した。奇怪な音が鳴り始め、壁が振動する。そしてその音が止んだ後、ヴァンルスは正面の壁を押した。壁は扉のように開いて彼らを内に迎えた。

「……この面倒臭さはもう少し改善されるべきだと思うんだ」

そう一人ごちるヴァンルスだった。

「なら、総長にそう言ってみろ」

ジェンスヴェルが期待しなかった答えを返したのに驚く暇もなく、再び階段が現れた。今度は下りではなく、地上へ上がっている。

登り切ったそこには、二人が先ほど辿り着いた屋敷が建っていた。しかし、屋敷は使われているようであり、あちこちの窓に明かりが見える。そしてそこは――夜だった。

## 第9夜

---

開いた窓から暖かな春の日差しが差し込む。ジェンスヴェルは柔らかな布団の中から起きだして、不機嫌そうに目を瞬いた。

部屋の戸が開いて、一人の青年が入ってきた。ヴァンルスではない。栗色の髪が光を受けて琥珀のように輝いている。

「おはよう、ジェンスヴェル。長旅ご苦労様。よく眠れた？……その様子じゃ眠れなかったのかな」

見た目通りの優しい口調で、青年は尋ねる。ジェンスヴェルは不機嫌さを崩さずに組織の医師の名を挙げた。

「コルビューネ・ランソワール女史のおかげで睡眠は申し分ない」

「何かされたの？」

「身体検査の挙句、睡眠薬と回復薬を飲まされた。そのせいで頭痛がする」

なら、水を持って来てあげようかと青年は提案したが、ジェンスヴェルは断った。

「いや、いい。セイフォン、何か言うことがあって来たんじゃないのか」

セイフォンという名の青年は、微笑むと言伝を告げた。

「総長がお呼びだよ、ジェンスヴェル」

半ば予想していた回答に、ジェンスヴェルは「分かった」とだけ答えた。セイフォンはじゃあ、と部屋を出ていった。見た目には良家の子息にしか見えないが、セイフォンは組織の中でもやり手の一人だった。どんな依頼でもにこりと笑って受け、完璧にこなす。字名は”双障鳩”。組織で唯一血縁者を持っており、二人はよく似ているため字名に双の文字を含んでいる。血縁者とは弟で、こちらは名はアジリス、字名は”双塞鳩”という。性格は兄とはかなり違って闊達である。兄より腕は劣るが、それでもこれまで任務に失敗したという話は聞かない。二人とも組織でジェンスヴェルに親しげに声をかけられる数少ない人物である。ヴァンルスがその様子を見れば、啞然とするかもしれなかった。

字名は組織に入ることが認められれば、誰でも持つことになる。本名を隠すために必要な場合があるからだ。組織でも偽名を用いている者はいるだろうが、組織設立時からの決まりだと聞く。個人の特徴を示す字、役割などを示す字、その人を例えた生物名で構成されることが多い。付けるのは専ら副総長である。

ジェンスヴェルは軽く着替えると、戸をくぐった。

「仕事が立て込んでいなくてよかったよ。よく戻ってきてくれたね、ジェンスヴェル」

金色の長髪、片眼鏡をした若き総長レイヴィックは微笑んだ。

ここは総長の総長の執務室である。薄暗く、埃っぽさが充満している。部屋には二人以外の姿は見えない。

「早速だけど、仕事の話にかかろうか。今回はなるべく少数精鋭で確実に獲物を仕留めるつもりだ。詳しい役割分担は後で仕事に向かう全員を集めて伝えようと思う。まずは仕事の内容を伝えておかないとね」

.....

そう言うと、レイヴィックは腰かけていた椅子を引いて机の引き出しから数枚の紙を取り出した。

渡された依頼書をジェンスヴェルが読み終わると、同時にレイヴィックが補足を加えた。「それに書いてある通り、依頼内容は要人暗殺だ。現政府の首相補佐殺害。そのために少ない人員で、かつ無事に仕事を運ぶために君も呼ぶことにした。……それに、そこには書かれていないけれど、なるべく人目に付くところで、との注文付きだ」

ジェンスヴェルは頷くと、書類を返した。

「それで、行うのは何時になる」

問うたジェンスヴェルに、総長は短く答えた。「一週間後だ」

「随分準備に時間をかけているんだな。それとも、その日に何か動きがあるのか」

ジェンスヴェルの考察に、レイヴィックは出来の良い生徒に教師がするような笑みを向けた。「正解。依頼が依頼だから慎重にしているのと、一週間後に首相が外遊するのに彼も付いていくのさ。何人かにその情報についての諜報を行ってもらっている」

「話はこれで終わりか」

「いや。……ジェンスヴェル、正体は知られなかったね？」

やや表情を改めた総長に、ジェンスヴェルは素っ気なく答えた。

「恐らくな」

思い出す限りでは、正体を暴かれるような手掛かりは与えていないはずだ——道中を共にしたヴァンルスに、己が吸血鬼であることは。

総長は若干申し訳なさそうに言った。

「ヴァンルス以外に行かせようかと思ったんだけど、ちょうど手があいていたのは彼だけだったんだ。悪かったね。それから、街での様子はどうだった？」

全ての報告を終え、屋敷から外に出たジェンスヴェルの瞳に昇りきった日光が投げかけられる。目を細めて、ジェンスヴェルは屋敷を囲む森林の中に姿を消した。

ヴァンルスはジェンスヴェルを捜していた。セイフオンのように誰かに頼まれてということではない。ヴァンルスも次の仕事に駆り出されることになっていた。それまで時間がある。その間に、彼がジェンスヴェルに対して感じた疑問を解消しようと思ったのだ。

しかし、ジェンスヴェルの姿は屋敷内のどこにも見られなかった。組織の仲間に聞いても、誰も知らないと言うばかりか、彼が戻ってきていることさえ知らない様子の者が大半だった。最後に尋ねた三人は、ヴァンルスに吐き捨てるように言った。

「お前、黒死蝶にくっついてまわってるらしいが、あいつに関わってもいいことないぜ。早いこと止めないと、明日には死体なんてことになりかねねえ。実際、昔は何人か奴に絡んだやつを殺しちゃったって聞くしな。最近はそういうこともないっていうが、入って日の浅い馬鹿がちょっとかい出しては痛い目に合っているのを見てるしな。早々に手え引いた方が身のためだぜ」

入って日の浅い馬鹿は、そう言われてたじろいだが、はいそうですかと引き下がるわけにもいかなかった。煙草を啜って賭け事のようなことに興じている男達に礼を言うと、その場から去った。

ヴァンルスは、ジェンスヴェルが街へ赴く一年程前に組織に入った。入って半年は訓練や軽い任務で忙しく、屋敷には長くいることが少なかった。その後正式に組織に入ることができ、任務が与えられるまで待ちぼうけを食らうことになった。その時にジェンスヴェルを目にしたのだ。彼は細い体をびったりとした黒い服に包んで屋敷の廊下を静かに歩いていた。それを見た他の者は会話を止め、畏怖するように動かなくなった。そしてそれを彼は気にも留めずに横を通り過ぎて、廊下の角に姿を消した。ヴァンルスは何故、少年なんかがこんな血なまぐさい組織に身を置いているのだろうと不思議に思い、その場からそそくさと去ろうとしている男たちを捕まえて話を聞いた。ジェンスヴェルのことを知らないと言った彼らの顔は今でも覚えている。そして彼らはヴァンルスが新入りだと分かると、ジェンスヴェルについて分かっていることを教えてくれた。

彼こそ、この組織”メルヴェール”で、総長を除いて最も強いと噂されていることを――。

そのことを聞いて、すぐに信じられる者はほとんどいないだろう。細身の少年という見た目からの印象を得た後は特に。ヴァンルスももちろんそうだった。だが、ヴァンルスが今までの新入りと違っていたのは、むやみに手を出そうとしなかったことだ。大抵の新人は、ジェンスヴェルに喧嘩を売った結果、数秒で地に倒れることになった。

ジェンスヴェルを知ってから、ヴァンルスは彼に興味を持ち、何かと話しかけるようになった

のだが相手にされなかった。しつこく声をかけるうちに、むしろ嫌われてしまったようだ。それが総長の目につき、一緒に任務に送り出された時に、ヴァンルスはジェンスヴェルの仕事の鮮やかさに――実際はジェンスヴェルはヴァンルスと共にいるのが嫌でさっさと依頼を片付けたのだが――心を奪われた。

それから一層ヴァンルスはジェンスヴェルに付きまとうようになったのだが、ジェンスヴェルは街に仕事場を設ける試みに送り出されてしまった。

それだからこそ、彼を呼び戻す役目をもらった時は純粋に喜んだのだが、思ったほど甘くはない旅路になってしまった。まさか魔女に出会うとは思わなかったのだ。思い出すと、コルビューネ女医に再治療してもらった傷が痛む。

「あら、ヴァンルス。ジェンスヴェルを捜しているの？」

突然聞こえてきた少女の声に事実を言い当てられて、ヴァンルスは飛び上がった。後ろを振り向くと、腰まで届く柔らかな金色の髪と、高価そうな衣服、そして幼さをかき消す極上の美しさを備えた美貌が目に入った。

「ローゼ様……」

そこに立っていたのは、紛れもない副総長その人だった。

「ごきげんよう、ヴァンルス」

ローゼはにっこりと艶やかに微笑んだ。

「いやだわ、ヴァンルス。様付けなんて」

くすくすと笑うローゼに、ヴァンルスはどう弁解すればよいか分からなかった。ヴァンルスがジェンスヴェルを追い掛け回していることは周知の事実であるし、副総長であるローゼがそのことを知らないはずがない。もしかすると、彼女は遠回しに注意をしに来たのかもしれない。ジェンスヴェルは彼女のお気に入りなのだ。

副総長ローゼは、副総長という肩書を持ってはいるが、その実総長のような仕事はしていない。そもそも彼女について知られていることはあまりに少ない。組織に少女がいるというだけで異質な感じがするが、彼女は平然としていつも総長のそばにいた。ヴァンルスはローゼに関する話はほんの噂話しか耳にしたことがない。それは彼女が総長の年の離れた妹であるとか、実の娘であるとかいう他愛のないものばかりだった。確かに、二人は似通った雰囲気醸し出しているし、ヴァンルスにしてみれば羨ましい限りの美しい金髪を持っていた。しかし、ヴァンルスはその噂に言葉にできない違和感を抱いていた。彼女の話し方は、決して見た目の年齢の少女が大人の真似をしているようなものではなく、板についている。違和感の正体は、ローゼと話している時に感じる、まるで淑女か貴婦人を前にしているような感覚からくるものかもしれない。

「それで、ジェンスヴェルを捜していたのかしら？」

ローゼの再びの問いかけに、ヴァンルスははっと我に返った。相手の顔を窺うと、別段不快そうな表情には見えない。ヴァンルスの思い過ごしだったようだ。

「え、ええ……。次の仕事でも一緒になると聞いたので彼に挨拶しておこうかと思ったのですが、全然見当たらないので今日はもう諦めようかと思っていたところです」

「あら、そうなの？なら、代わりに私が見つけておいてあげましょう。私、まだ彼が帰ってきてから会えていないの。後で貴方に声をかけるように伝えておくわ」

「いや、でも……」

これだけ捜しても影さえ見えないのだから、ローゼにも見つけられないだろうと言いかけた。しかし、ローゼは断言した。

「心配しなくても、私なら彼を見つけられるわ」

ヴァンルスは何も言えなくなった。ローゼの言い方に閉口したからではない。彼女の口振りが、まるで事実を言っているかのように自然だったからだ。

「じゃあ、行くわね」

「……ローゼ様」

「何かしら？ヴァンルス」

ヴァンルスは自分が何を言おうとしているのか分からなかった。次に出てきた言葉に、自分で驚いたぐらいだ。

「ジェンスヴェルについて、何かご存じではないですか」

## 第10夜

---

「知っているわ」

「教えていただけませんか」

身を乗り出したヴァンルスに、ローゼは母が子を諭すように言葉を紡いだ。

「忘れたの、ヴァンルス。組織の中で個人の過去や素性を暴くのは禁忌であるということを」

思い至って、ヴァンルスは口を噤む。

「そうね、私も不思議だわ。貴方はどうしてそれほどにジェンスヴェルについて知りたがっているの？」

答えはない。ローゼは笑って身を翻す。

「どうしても知りたいのなら、ジェンスヴェルと腹を割って話せる仲になるしかないわね。じゃあ、私は行くわ」

裾を揺らしながら、ローゼは森の中に踏み入ろうとした。そして、一度立ち尽くしているヴァンルスの方を向いて忠告した。「ヴァンルス、付いて来ては駄目よ。ジェンスヴェルが逃げてしまうから。大人しく待っているのが一番だと思うわよ？」

そして返答を待たずして、小さな体は緑の中に見えなくなった。

「……僕はそんなに気の長い方じゃないですよ、ローゼ」

ヴァンルスの眩きは春風の中に散り散りになって消えた。

泉から流れる水の旋律が大木の上まで聞こえてくる。ジェンスヴェルは森の奥で、白く枯れた樹に身を預けていた。幹の白さと、髪と服の黒さが対照的である。

「こんなところにいたのね」

休息を邪魔する声の下から聞こえてきて、ジェンスヴェルは思わず目を閉じたまま眉を寄せた。

「よくここが分かったな。俺も初めてここに来たが」

そのままの状態で言うと、すぐ傍からうふふ、と笑う声がする。目を開くと、ジェンスヴェルの乗っている枝の近くの枝に、少女が座っていた。

「だって、この世界の創造主は私ですもの。この狭い世界で私に分からないことはないわ。それでなくとも、貴方の気配は消していても分かるのだから」

「恐ろしいことだ」

「あら、全くそう思っていないくせに」

ジェンスヴェルは体を起こした。

「少なくとも、俺が殺した魔女よりは数倍恐ろしい」

「そう、その話を聞いたかったの。レイヴィックから聞いたわ。街で魔女の抹殺を依頼されたと

「同族を殺した話を聞きたいのか？」

「是非」

それはまるで少女が童話をせがむ光景のように見えたが、内容はそれからかけ離れていた。

――少女ローゼは魔女である。それも純血、つまり最も強大な魔力を有する者である。魔女の祖と言っても過言ではない程、彼女は長い刻を生きている。ヴァンルスが違和感を感じるのも無理はない。ローゼの身体は魔力によって成長を止めたままなのだから。もちろん、自分で身体を成長させることは容易いが、彼女はあえてそうはしていない。

そしてジェンスヴェルは、吸血鬼である。魔女の親戚と言っても良いが、魔女より遥かに魔力の容量は少ない。そして字の通り、人の血から魔力の補充を行わなければならない。

魔力は、決して特別な力ではない。人も、動物も、植物も決まった量の魔力をその内に循環させている。魔女は他生物を凌駕する魔力を持ち、そしてその力を意のままに操る術を持つ者のことを指しているのだ。また、魔力は生物を生かす生命力であると同時に消耗精力である。どの生物も自ら体内で新たな魔力を生み出しては、消費することを繰り返している。誰もそのことを知らないために、魔女が特別であるように感じるだけなのだ。魔女は魔力が生産される量が、まるで大雨の後の激流のように尋常ではないのだ。人としての感覚や感情がその影響を受けて歪むのは、ある意味必然である。

しかし、地上で唯一自分では魔力を生産できない生き物がいた。――それが、吸血鬼である。

吸血鬼という存在は公には知られていない。魔女は実在であることが分かっているが、吸血鬼はまさに作り話の類だった。それは、突然変異であるために希少だからだ。彼らの魔力の容量は人よりも数倍大きく、身体能力も常人とは比べ物にならない。しかし、魔力は失われていくばかりで満たされることはない。彼らは丁度良い供給源を見つけていた。それこそ人間である。魔力はそこまで多くはなく、かつ弱い。いくらでも魔力を補給できるというわけだ。中には人間が死ぬまで血を吸い取る者もいたが、ジェンスヴェルにそれは必要なかった。何故なら、殺した獲物からいくらでも摂取することが可能だからだ。

吸血鬼が絶対に口にしてはいけないもの、それは、魔女の血である。いや、どんな生物も魔女の血を体内に入れた途端、満たされた杯にさらに水を加えるように、魔力が許容量を超えて絶命する。吸血鬼の命でさえ簡単に奪うのだから、人間などは体中から血を吹いて死ぬかもしれないかった。

「ねえ、聞かせて頂戴？」

そんな恐ろしげな様子とは遠いところにある少女は首を傾げて、吸血鬼に話を請う。

## 第11夜

暗黒組織「メルヴェール」。金銭と引き換えにどんなことでも請け負う得体の知れない集団。その存在を知っているのは、片足を闇に踏み込んでいる者ばかりだ。今回も、そういった者からの要請によりこの組織は政府の役人にまで手を伸ばすことになった。

暗殺や強奪など、似たような犯罪を商売にしている他のところと同じく、メルヴェールも依頼主の素性を求めることはない。しかし、政府の高官の殺人要請ならば、その目星は付きやすい。総長レイヴィックは、依頼主をほぼ確信していた。最近地方役人から中央へ出世した男だ。まだ四十にもなっていない。貫禄と呼べるものはまだないが、力と勢いがある。人望も少なからずあるようだ――それ故、敵も多いが。この国の頂点に立つことも夢ではない、そういう男だった。だがその男以外にも、野心にあふれた政治家は数えきれないほどだ。レイヴィックがその男に焦点を当てたのは、例の首相補佐官がいなくなれば、彼は近い将来その座に座ることができるからだ。そして、それを足掛かりにして首相の座に納まることは難しくない。何故、自分の力で相手を追い出せないのか。それは、相手の力が強いこと、そして血筋、出身を加えれば容易に答えが出る。この国も他の国同様、家系を重視される。国を支える貴族であっても、その階級は厳格だ。中枢に坐しているのは大半が国ができる前から中央で権威を振るっていた貴族である。首相も補佐官も同様に名家の出である。その次の位からは、地方出身の者も少なくはあるが、いないことはない。依頼主もその一人である。補佐官の部下の部下程の位にいる。彼がどうあがいても、彼の出世はそこ止まりだろう。しかし、補佐官が殺害され、生じる混乱を彼がうまくまとめ、首相に有能であることを示せば、補佐官にのし上がることができる。彼が指定された日時は庁舎に出勤するという報告を受けている。疑われることがないように、周到に身の回りに気を配っていることだろう。

しかし、実際依頼主の素性などレイヴィックにとっては大したことではない。大事なのは、彼が今回の以来の後、組織の”お得意様”になるだろうということだ。出世によって資金も十分に持つことになる。地方出身の彼の昇進に不愉快になる人間は少ないだろう。そういう時、メルヴェールに任せてくれれば彼は自らの手を汚すことなく邪魔者を始末できるのだと理解させれば、彼とは今後ともお互いに良い取引ができることは間違いなかった。

厚いドアが音もなく開き、ふわりとドレスの裾を巻き上げてローゼが入ってきた。

「……やあ、ローゼ。随分ご機嫌だね、ジェンスヴェルと話をしてきたのかな？」

ローゼは紅を塗ったように紅い唇から上品な笑い声を聞かせた。

「正解よ。ねえ、あの子の話を聞く限りだと、足りなくなっているんじゃないかしら」

何を、とは言わなかった。しかし、レイヴィックは頷いて答えた。

「ああ、そうだね。仕事の前……そうだな、今夜か明日の夜にでもまた呼ばないといけないね。何度も呼びつけると不機嫌になりそうだけど、仕方がない」

「あの子にはそれぐらい頻繁にした方がいいんじゃないかしら？昔のように、むやみに喧嘩を買うようなことがなくなったとはいえ、しつこい蠅が付いちゃって不安だわ」

そう言うローゼの顔から微笑みが消えることはない。あくまで楽しんでいるようだ。

「昔は感情が薄かった分、絡まれやすかったからね。……懐かしいね、もう大分前のことだ。ジェンスヴェルは最初、僕の血を受け付けなくてどうしようかと思ったんだ」

「貴方は特別な存在だもの。この世界——ここではあちらの世界ね——にたった一人しか存在しないのだから。私も懐かしいわ。今日は思い出話でもしましょうか？」

「……たまには良いかもしれないね」

そして二人は秘密を共有した者同士の笑みを浮かべて、昔話に花を咲かせた。

「――君の名前はジェンスヴェルとしよう。字名は訓練が終わって一人前になってから付けることにして……何か聞きたいことはあるかな」

”魔女狩り”の災禍に遭った村からローゼが連れ帰ってきた子は、まだ十になるかならないかの痩せ細った少年だった。村の奴隷として扱われてきた為かその眼は何も写していないかのようで、まるで人形のような無表情をしていた。しかし、レイヴィックの言うことは耳に入っているらしく、首を横に振る。

「そう、それならローゼに付いて行ってくれ。君の部屋を用意してある。これからしばらくは、彼女に技術を学ぶといい。組織の業務内容については……」

「もう、聞いた」

少年が今まで貝のように閉じていた口から声を発して、レイヴィックの説明を遮る。表情通りの感情を込めない口調だった。普通なら生意気な、と苛立つところだろうが、総長は静かに頷いただけだった。

「今日はもう休んでいいよ。明日から訓練が始まるからそのつもりで」

ローゼの後に付いて少年が部屋を出た後、レイヴィックは一人、笑いが込み上げてきた。

「聞いてはいたけれど、まさか本当に希少な吸血鬼、しかも突発的に生まれた純血をこの目で見られる日が来るとはね。彼がどう成長していくか楽しみだ」

その後、肘を机の上に乗せ、顎に手を当ててしばし沈黙した。

「問題は、まだ覚醒したばかりで未熟だということだ」

レイヴィックの懸念はしばらく後になってから実現する。

翌日から訓練が始まった。ジェンスヴェルは吸血鬼であるということを除いても、急速に教えられる技術を消化していった。ローゼは森の中での訓練から帰ってくる度に、レイヴィックにその様子を報告した。

しかし、二人の間には心配があった。それはジェンスヴェルの”魔力確保”だ。閉じた世界では、組織の関係者以外の人間は存在しない。彼らに血を求められるわけがない。ローゼが魔女であることも、レイヴィックが魔女に近い存在であることも、ジェンスヴェルが吸血鬼であることも知るものは誰一人としていない。ジェンスヴェルに至っては、組織にいることすら知らない者がほとんどだ。そんな状況で、他者に血を求めることができるわけがない。

ローゼの血を与えれば、幼い吸血鬼の命は瞬く間に消える。それよりずっと魔力の弱いレイヴィックの血があれば問題ないと二人とも考えていたのだが、そう上手く事は運ばなかった。

ジェンスヴェルがレイヴィックの血を拒絶したのだ。

もちろん彼は十分な説明を受けた上でレイヴィックから血を分けてもらおうとした。しかし、口に含んだその血を飲み下す前に、吐き戻してしまったのだ。彼自身も不思議な顔をしていた。飲もうとしても飲めないのだ。無理に飲もうとすると、酷くむせてしまう。

その場は諦め、有効な打開策を見つけておくということになった。しかし、小さな体に残る魔

力は日々消費されていく。早くしなければ、手遅れになりかねない。本人はまだ不調を感じていないようだが、体が動かなくなる日は近いだろう。あるいは、その前に、本能が勝って暴走するかもしれなかった。

そして――。

## 第12夜

---

『日没後、西の森にて待つ』

ジェンスヴェルが訓練から帰り、休息を取って自室に戻ると、そう書かれた紙切れが無造作に置いてあった。彼は首を軽く傾げた。このような時にどう対処すればいいのか、まだ教わっていないからと、迷いが生じた。成長した彼なら、無駄な労力を払わない為に即座に無視を決め込んだだろう。しかし、擦り切れた少年の自我は、誰に相談するでもなく、行けばいいのだろうという半ば投げやりな心持ちで向かうことを決定した。

「あれだけで来るとは正直思わなかったな。やはり君は幼いね」

暗い森の中から男の声がした。長身が木々に紛れ込みそうである。月は空に昇っていたが、その姿は朧で、地上に降りる光は頼りない。

ジェンスヴェルは何も言わず、また武器も一つも持たずに立っていた。

「何の用かと思っているかもしれないな。実は君のような少年がこんな組織にいることに反感を抱く者もいてね、今日は直接その実力を知ろうと思って呼び出したわけなんだ」

それは紛れもない嘘だった。男はジェンスヴェルの存在を偶然知り、単純に暇つぶしの為に呼び出した。わざわざ書置きまでしたのは、この男が生来手の込んだ仕事を好む気質によるものだ。ちなみに弱者をいたぶる隠れた性癖もある。端的に言えば、彼はもっともらしい理由をつけてジェンスヴェルの殺害を企てていた訳である。彼にとってはジェンスヴェルは見た目通りの少年としか映っていなかった。

「……」

対してジェンスヴェルは、男を観察していた。身長、体重の推測から始まり、男が纏う緩やかな殺気にも反応していた。訓練の成果が早くも表れていた。そして同時に、彼自身の身体に起こっている異変も自覚していた。酷く喉が渇く。ただ、それと自身の正体とを結びつけるには至らなかった。まだ一回の吸血行為も行ったことのない彼にとって、自分が吸血鬼であるという自覚は定着していなかったのだ。

男はそんなジェンスヴェルの様子に気づいた訳でもないだろうが、遊戯の開始を告げた。

「じゃあ、始めよう。君は私を殺す勢いで向かってきてくれればいい。私も同様にするが、手加減はするつもりだ。お互い、もう駄目だと思ったら降参する。いいかな？」

ジェンスヴェルは小さく首を振った。男は満足気に頷く。彼はジェンスヴェルが降参して、それでも攻撃を止めない彼に慄き、絶望して死んでいく姿を想像して悦に浸っていた。

「では、開始」

男はそう言うなり、ジェンスヴェルに攻撃を喰らわす為に力を惜しまず迫った。

ジェンスヴェルは地面に薙ぎ倒された。男はそのまま細い首に手をかける。

「どうした？まだ何もできていないじゃないか。わざわざ少年を組織に入れるぐらいだから、最低限の力は持っていると思ったのだがね」

指に力が込められる。男の眼は異様な光を放っていた。その失望の中にはこれからしようとしている残虐行為に抱く歓喜も見え隠れしていた。男が片手を首にかけたままで背に回したもう一方の手を戻した時、ナイフがその手中にあった。動物の皮を剥ぐ時に用いるような、小ぶりの代物である。

視界が歪み、光が明滅する。ジェンスヴェルは自分の身体が、何か異変をきたしているような感覚に陥っていた。地面に倒れたのは分かったが、痛みはない。動こうと思っても、身体は一切の命令を拒否するように指一本動かない。喉の渇きは一層酷くなるばかりだ。その時、視界に原色が乱入した。真紅。

――血。

それを認識した時、ジェンスヴェルの理性は本能に呑み込まれた。

抵抗も何もしないジェンスヴェルに、ナイフを構えた男がさすがに不審に思う。彼は、ジェンスヴェルが彼の言葉を信じ、そして騙されたと分かって泣き叫ぶのを期待していたのに、肩透かしを食らったような気分だった。それでも、脅せばそうなると思ったのか、ナイフをよく見えるようにかざす。それでも、ジェンスヴェルの視線は倒れた時にかかった前髪のために捉えることができない。

「……おい？」

転倒の際に頭を打って気絶したのかと勘違いした男は、力強くジェンスヴェルの黒い髪を引っ張って上半身を浮かせた。そして、頬を軽く切りつけた。

その時、ジェンスヴェルの細い腕が上がり、男の首近くに伸ばされた。

「起きてい……」

男の言葉は、最後まで続かず、くぐもった呻き声に変わった。ジェンスヴェルの手が目に見えぬ速さで一閃し、男の喉を切り裂いたのだ。血が飛び散る。

その後の男の行動は、さすがに暗殺などを手掛けるだけのことはあった。浅かった傷口を片手で抑えると、即座に起き上って後方へ跳躍し、ジェンスヴェルから距離を取った。

しかし、「この……」と口を開いて罵倒の言葉を浴びせようとした時にはジェンスヴェルの姿は目の前から消えていた。男が息を飲んだ瞬間、背後から恐ろしいまでの圧迫感が襲ってきた。

とっさに前へ出ると、次の瞬間には男が立っていた場所にジェンスヴェルが豹さながらに飛び掛ってくる場所だった。

未だ事態を把握できていない男に、血を求める吸血鬼は容赦なく襲いかかる。

男が猛攻撃の中でジェンスヴェルの変容に怯んで隙を見せた。吸血鬼は見逃さない。

自分の倍以上の体重がある男の身体を引いて樹木に叩きつけると、首の傷を再び――今度は深く抉った。大量の血液が噴き出す。男は悲鳴を上げることすら叶わずに意識を手放す。男が最期に見たのは、冷たい光を放つ、まるで月のように金の色をした双眸だった。

――吸血鬼の食事が始まった。

「やっぱり、もう限界だったみたいだね」

館の上から、ジェンスヴェルの吸血を覗く者がいた。

「さて困った。このままだと、血に溺れて手が付けられなくなる」

あまり困っていないように、微笑を湛えているのは総長レイヴィック。腕には改造された猟銃のようなものを抱えている。

「食事に夢中でこちらに気づかないといいけど……逆に感覚が鋭くなっている可能性もあるから、早く済ませてしまおう」

長い銃身を構え、焦点をジェンスヴェルの肩に合わせる。気絶する程度に傷をつけるつもりだった。

「装填」

低く呟くと、銃口がわずかに蒼い輝きを点す。迷いなく引き金を引いた。

銃声は――鳴らなかった。

レイヴィック自身の魔力が銃弾となって、ジェンスヴェルに襲い掛かる。彼がそれに勘付いた気配はない。しかし。

弾丸が肩口を抉る前に、ジェンスヴェルは一瞬身体を震わせると素早く振り返った。

「！」

さすがにレイヴィックも身を引いた。同時に、弾丸はジェンスヴェルの肩から背中を切り裂いた。小柄な体はすぐに折り曲げられた。目覚めたばかりの吸血鬼は起き上ろうとはしなかった。

レイヴィックは焦らずとも、急いで地面に降り立ち、傍へ行って彼の傷の様子を見る。

――傷口の形態は異なってしまったものの、結果的には意図したとおりになった。ジェンスヴェルの瞼は固く閉じられ、銃創からは先程得たばかりの魔力が血液と共に流れていく。

「来たばかりで組織の規則を破るとはね。管理を不徹底にしていた僕にも責任はある。……まだまだ青二才だ」

溜息をついて、レイヴィックはジェンスヴェルを抱き上げた。

二人が去った後、その場には何も無かった。ただ、男の死体があった場所には若木が夜風に揺られるばかりだった。男がいなくなったことについて、疑問の声を上げるものはほとんどいなかった。

その後、ジェンスヴェルの背には白い皮膚を斜めに裂く傷口が残り、彼はレイヴィックの血を受け入れ、何らかの事情で魔力が補給できない時はその血を受けた。



## 第13夜

レイヴィックが暗殺の数日前に仕事に関わる者を招集し、詳細を知らせ、役割分担を命じ――

首相補佐官暗殺決行の当日になった。

一行は、普段使われている出入り口ではなく、地下に集まった。目の前には重厚な扉。そしてその横には、ローゼが見送りに立っていた――場違いさと自然さが奇妙に入り混じっている。

「では、諸君。旅立つことにしよう」

総長の言葉に答えるものはなく、各々頷いたり、無視したりした。今回は珍しいことに、総長も同行する。それだけこの依頼が重要であることを示していた。

ヴァンルスは、総長に頷いてからジェンスヴェルの方に顔を向けた。睨み返されて、慌てて前を向く。結局、ジェンスヴェルはあの後ヴァンルスの前に姿を現さなかった。ローゼが伝え忘れたとも思えないが、彼女ならわざとしても不思議はない。また、ジェンスヴェルが今総長に対してしたように完璧に無視したということも十分考えられる。数日前に顔を合わせた時も、ろくに話をする暇もなく、会議が終わると彼は姿を消していた。ヴァンルスは人知れず溜息をもらした

「行ってくる」

「行ってらっしゃい、気を付けて」

レイヴィックとローゼは恋人のように笑みを交し合う。

総長は扉に両手を掛け、内側に引いた。扉の奥には、綺麗に整備された通路が伸びていく。その先は暗黒に彩られていた。

レイヴィックは今度は何も言わずに、洋燈を持って先頭を進む。他の者は後に続く。流れに沿ってヴァンルスは手前の方に、ジェンスヴェルは最後尾に落ち着いた。

暗い洞窟の中に、足音が小さく響く。大きくないのは、職業柄、そしてこれから行うことに対しての心積もりでもあるからだろう。ジェンスヴェルと総長に至っては、微かすぎて合わせて一人分といった程度である。

ヴァンルスはできればジェンスヴェルの近くに行きたかったのだが、今更それも不自然であったし、仕事前に不謹慎だと思われかねない。何よりどんなに小声で話しても内容は筒抜けだ。それは避けたかった。

通路はそこまで長くはなく、思ったよりも早くに地上への階段が現れた。以前ジェンスヴェルとヴァンルスが時間をかけたような仕掛けはない。ただ階段が続く天井に四角く区切られた板の戸が見えるだけだった。それを押し開いてみると、朝靄漂う林の中だった。

「そういえば、昼夜が反転してるんだった」

ヴァンルスの呟きも、靄の中に消えていく。

地上に出てから南東に歩を進めると、すぐに目的の街が見えてきた。教会の鐘楼が高く聳えているのが見える。

暗殺が行われることになる街は、立派だった。

## 第14夜

---

十人にも満たない一行は、ばらばらに別れて壁に囲まれた街の関所をうまく越え、また怪しまれない程度の距離を保ちつつ合流した。そして街の大きな広場に行き当たると、当初の予定通り二手に分かれた。

ジェンスヴェルを含む数人は教会へ。総長を含む残りは首相が到着する役所の前方へ。

位置取りとしては、広場を中心として東に役所、その隣に教会。そして西に役所よりは低いが、十分な大きさのある建物が建てられている。総長たちはそこに向かったのだ。

広場にはすでに人が集まっており、中には声高に首相や政府への不満を叫んで警備員に束縛されるような者もいた。集まった大半は単なる野次馬のようだ。それらを尻目に、ジェンスヴェル達は教会の裏手に回った。今日は説法の日でもなく、辺りは広場の喧騒とかけ離れた静かさを保っていた。

裏口の錠を難なく壊し、一行はすぐ近くの扉に入っていった。石造りの階段が天へと伸びている。見張りの一人を下に残し、ジェンスヴェルを先頭に上を目指した。

上り切ると、頭上には鈍い金色をした大鐘が釣り下げられている。彼らがいるのは、街が見えた時に目にした尖塔である。

振り返って全員が鐘楼に上り切ったことを確認すると、ジェンスヴェルは短く告げた。

「首相を乗せた馬車が見える。各自持ち場につけ」

ここではジェンスヴェルが場をまとめる役割をしていた。あとの二人の男は口答えせずに、武器の用意をする。ジェンスヴェルはもう一度馬車の進行を見て、自分も準備を行う。馬車は人民に邪魔されて思うようには進めていない。役所前に着くのにはしばらくかかるだろう。

「なんで僕はここの担当なんだろう……」

首をひねるのは階段下に取り残されたヴァルススである。今日の仕事は、飛び道具を多く使うことになる。短弓を得意とするヴァルススは当然ジェンスヴェルと共になると、分けられた時には喜んだのだが、あろうことか総長が命じたのは見張りだ。単に手が空いているからというだけの理由で連れてこられたのかもしれない。まだ新人という扱いを受ける彼にはそうとしか考えられなかった。

見張りも重要な役目ではあるのだろう。しかし、どうにも不満が募る。上に行くなどできるはずもない。

なんとかすねる気分を首を振って追い払い、気を張り詰めた。間もなく襲撃は始まるのだから。

ヴァルススは目の前の扉を睨んだ。

## 第14夜

---

首相を乗せた馬車が広場によく登場した。周りを警備兵たちが囲っているが、集まる民衆の数は次第に多くなる。

ジェンスヴェルは普段は使わない弓を構えて、その様子を見ていた。間もなく開始の合図があるはずだ。それをじっと待っていた。

今まで街を覆っていた雲が割れ、太陽が姿を現す。  
どこかで何か破裂するような音が聞こえた。

即座に反応したジェンスヴェルの弓から第一矢が放たれる。それは馬車の屋根に突き刺さった。それに続くように、ばらばらと大量の矢が降り始めた。街の住民が悲鳴を上げて馬車から離れようとする。しかし、集まりすぎた民衆は容易には矢の雨から避難できなかった。警備兵が怒声を上げ、腰から剣を抜く。彼らの鎧にも矢は降るが、弾かれていた。どこから矢が降っているかを知った警備兵が周りの仲間に告げ、鐘楼を見上げる。しかし、逆光になってジェンスヴェル達の顔が分かることはないだろう。それがなくとも、彼らの顔は黒い布で大部分が隠されていた。

教会に近づこうと数人の警備兵が集団を掻き分けて進んでくる。その彼らは目的の場所に辿り着くことはなかった。目の前で起きた爆風に吹き飛ばされた。そして、動かなくなる。彼らの鎧には大きな穴が開いていた。そこから血が流れる。

広場は阿鼻叫喚の様だった。矢に射られる者、次々と起こる爆風に焼かれる者――。誰にも何もできなかった。襲撃はなおも続く。

ついに恐慌状態に陥って暴れる馬が馬車を引きずり、そして自身を縛る縄を引きちぎると、住民を蹴散らしつつ逃げて行った。取り残された馬車は横倒しになり、ただ車輪が空しく回っている。

ここで襲撃が止んだ。

負傷者の呻き声や、役所から何事かと駆けつけてきた増援の警備兵達の喚き声しか聞こえなくなる。

そして、ぼろぼろになった馬車の歪んだ戸が軋みながら開き、中から目的の人物がゆっくりと姿を現した。

怯えた顔を外に突き出し、広場の惨状に息を飲んで絶句する。その姿を確認した警備兵が大きな声を発しながら駆け寄る。途端に彼の顔に安堵がこぼれ、地面に足を下ろす。そして中にいる首相が馬車から降りるのを手助けするために、背中を見せた。

ジェンスヴェルの射た矢がその咽喉仏を正確に射抜いた。首相補佐官の体はゆっくりと傾き、馬車に鈍い音をたててぶつかり、そして広場に倒れ伏した。

悲鳴が再び上がる。それは、馬車の中から聞こえてきた。目前で命を失った男が仕えていた、首相その人のものだろう。



## Middle Night

---

「ジェンスヴェル」

自分を呼ぶ声に、ジェンスヴェルはうっすらと閉じていた瞼を開いた。

「……ジェンスヴェル？」

呼び声は近づいてきている。しかし、声の主はまだ彼がどこにいるのか分かっていないらしい。離れたところから木々をかき分けるような音がする。

強い風が辺りを包んでいる。そんな中、森の中を進むのは容易いことではないだろう。

「こっちだ、セイフォン」

ついに声をかけたジェンスヴェルに、青年は頭上を見上げてにっこりと笑う。それはさながら地上に降り立った天使のようで、見るものを魅了する。ジェンスヴェルは見慣れているので表情を動かすことはなかったが。

「館の中で暇を潰すのにも飽きたから、アジリスと一緒に少し遠出するつもりなんだけど、ジェンスヴェルも良ければ来ないかと思って。そっちに行っても良いかな？」手を伸ばして指をジェンスヴェルのいる樹上に向ける。

ジェンスヴェルは「ああ」と言いかけたが、途中で口を閉じ、視線を鋭くさせてセイフォンの遙か後方を睨んだ。セイフォンが不思議そうな顔をする。

「俺が下へ降りよう」

そう言ってセイフォンを制止すると、ひらりと着地する。

「ここにいても邪魔されるだけだ」

「誰か来てる？」

「面倒な奴が」

と言われただけで、セイフォンは得心したように頷いた。

「大変だねえ。じゃあ、早いところ行こうか。アジリスがお待ちかねだ」

「……あ」

間抜けな声が自分の口から洩れた。

「逃げられたかー」

溜息をつくのはもちろん、ヴァルスである。手には望遠鏡を持っている。

「やっぱり駄目か。その前に先客がいたみたいだし。にしても、ジェンスヴェルが他人に誘われるなんて初めて見た……」

実際はこれまでもセイフォン、アジリスはジェンスヴェルを誘っているのだが、そんなことを知らないヴァルスには新鮮に映った。小さな丸の中に切り取られた二人の姿が遠ざかっていく。そして、ヴァルスは見た。ジェンスヴェルが振り返ってこちらに向かって刺すような視線を投げたのを。

「……怖。できればもうお近づきにはなりたくないんだけど、そうも言ってられないしな」

意味不明な呟きを洩らす。聞く者はいない。

「まあ、あと少しの辛抱だ」

くるりと背を向けたヴァンルスが浮かべたのは、これまで見せたことのないような歪んだ笑みだった。

## 第15夜

---

初夏の日差しが地上へと降り注いでいる。しかし、辺りに吹く風は涼しかった。春から秋にかけて、世界は彩りを変えるものの、気温まで変わることがない。それが変動するのは唯一、冬だけである。下手をすれば凍死するような極寒の大气に包まれ、地上は時折猛烈な吹雪に襲われる。世界は白銀に埋め尽くされ、人間の視界を奪う。しかし、それはまだ先のことだ。今は晴天、空には雲が千切れてゆっくりと移動していた。

緑に染められた景観の中、白い洋館が建っている。結構な大きさがあり、まるで小さな城といった風情である。その立派な建物に黒衣を纏った者が近づいていた。

「ああ、ジェンスヴェル。そろそろ帰ってくる頃だと思ったよ」

重厚な木造の扉を開くと、金髪的美丽な男が机に腰かけたまま微笑んだ。埃の匂いが漂う室内の中には、彼だけでなく、もう一人長身の男が建っていた。こちらは精悍な顔つきと鍛えられた体格で、座っている男と全く違う。年齢は三十には達していない位だろうか。普段他人に気を払わないジェンスヴェルには正確な年齢は分からなかった。

「疲れているだろうけど、すぐにまた出てもらいたいんだ」

金髪の男、「メルヴェール」総長レイヴィックが笑みを消さずに告げる。

「構わない」

無表情でジェンスヴェルは答える。レイヴィックの視線は机の横に立つ男に向けられる。次の言葉に、ジェンスヴェルの眉が若干しかめられた。

「今回は二人で行ってもらおう。新しく入ったオルノスだ。元傭兵だから足は引っ張らないだろう。とりあえずは仕事の様子を見てもらえばいい」

続いて初見の男が口を開く。

「ジェンスヴェルっていったか、よろしくな」

良く通る声でオルノスがジェンスヴェルに笑いかける。口調にジェンスヴェルの外見を揶揄するような響きはなく、笑顔も爽やかなものである。あまり暗殺に向くような人間ではなさそうだと感じた。傭兵だったという鋭い雰囲気は欠片もない。

「お前さん、この組織の中じゃ腕がたつらしいな。時間があったら手合せ願うぜ」

まるで遊びに誘うような気楽さで言葉を繋げる。ジェンスヴェルは何か言い返そうとしたが、ふと何かに気づいたようにレイヴィックの方へ顔を向けて問いかけようとした。レイヴィックの方も頷いてジェンスヴェルが何か言う前に答えを差し出した。

「気付いたね。そう、彼は魔女の末裔だ。血はとても薄いから、身体が多少人より丈夫なだけだ。――もしかすると君にはちょうど良いかもしれない」

ジェンスヴェルは再び目の前の男に目を向ける。二人のやり取りを黙って見ていたオルノスは、驚いたように目を見開いている。しかし、次の瞬間には破顔した。

「分かっちゃまったか、流石だな。今までこんなことなかったんだが、先刻総長さんに指摘されて驚いたが、お前さんにも見破られるとは。大したもんだ」

何故か感心している。レイヴィックの方は涼しい顔で「私はともかく、彼は少々特別でね。おいおい聞くといい」などと言った。

「――さて、そんなことよりも」

姿勢を正して総長は真面目な顔をした。

「仕事の話だ」

ジェンスヴェルは仕事の内容を聞いて、誘拐とは珍しい、という率直な感想を抱いた。殺人や暗殺、とにかく彼に回る依頼は――それはジェンスヴェルの生命維持のために都合が良いからでもあったが――血塗られたものばかりだった。

一つ前の仕事で栄養補給は行ってきたので、レイヴィックから血を受ける必要もなく、説明を聞いてすぐに二人は洋館から出発した。

「ここは随分とすごい所だよな。昼夜逆転なんて身体感覚がおかしくなりそうだ」

すぐにオルノスが話しかけてきた。

「さあな」

ジェンスヴェルは無関心に応じる。

「素っ気ねえな。俺達はこれから仕事を共にする仲間なんだぜ」

オルノスの方は気分を害した風もない。しかし彼は知らなかったが、ジェンスヴェルが仕事の話と関係ないことで返事をするということは珍しいことでもあった。以前、今回のように無理矢理誰かと組まされた時は、相手が疎ましかったのもあるが、片っ端から聞き流していた。

「すぐ解消する関係だ」

「どうだかな。聞いたけど、メルヴェールでは最低二人で仕事を行うんだろ？けど、お前さんはほとんど一人で仕事をするんだってな。しばらくは新入りの俺の相手をさせられるんじゃないか？」

オルノスの言う通り、メルヴェールでは二人が仕事をする上での規則となっていた。仕事の成功率が上がるということや、例え片方がへまをして捕まるようなことがあっても、もう一人が組織のことが漏れ出さないように口封じできる等といった背景が裏にある。誰と誰が組むかは、総長が相性を考えて指名する。ジェンスヴェルが一人で仕事をするのには、副総長直々の訓練のおかげで今まで一度も失敗したことがないのに加え、複雑な事情を有する吸血鬼であることが大きく関わっている。

しかし、オルノスが魔女の末裔であることが分かっている以上、ジェンスヴェルが吸血鬼であ

ることが判明したとしてもなんら不都合はない。この男の言う通りになる可能性は皆無ではない。ジェンスヴェルは表情に出さないまま不機嫌になる。

「――気に障ったか？」

感付かれたか、とジェンスヴェルは隣を歩く男の方を睨んだ。オルノスは冗談だ、と言ってまた朗らかに笑った。

「まあ、お前さんのことがちょっと気に入ったから言ってみただけだ。別に確証はない。一人でいるに足る技能があるらしいからな」

「無駄口だな」

「俺は他愛もないことを言っていた方が仕事に切り替えやすい性質なんだ、ずっと仕事のことを考えて黙っているなんて性に合わない。お前さんとは逆かもしれないが、道中辛抱してくれ」

ヴァンルスと共にいた時よりも疲れることになりそうだと、ジェンスヴェルは難なく悟った。

## 第16夜

---

「お前の母親に頼まれてきた」

冷淡な声で告げると、目の前の少女はびくりと身体を震わせると、顔を上げて澄んだ瞳で見つめてきた。

「お前が忍び込んで攫ってこい。俺は見張りを引き受ける」

目的の屋敷に到着した途端、ジェンスヴェルは第一にそう言い放った。オルノスが意外そうな顔をする。

「いいのか？」

「自信がないのなら」

俺がやる、という言葉はオルノスが手を振って否定したことで発されることはなかった。

「いや、そう意味じゃない。俺が、仮にも先輩であるお前さんの仕事を奪っていいのかと思っただけだ。任せてくれるというなら、喜んでやろう」

今は彼らが初めて顔を合わせたのと同じ昼。外に出た時は夜であり、彼らは少しの休憩を挟むだけで眠ることなく標的のいる場所へ着くことができた。メルヴェールが存在する世界が昼夜逆転なのは、仕事を行う際に少しでも負担を減らすことができるように創造主が機転を利かせたからでもある。他にも理由があるようだが、知っている者はいない。

「誘拐はもちろん夜行う。その前にある程度の様子を頭に入れて、その後必要があるなら仮眠をとる」

淡々とジェンスヴェルが述べる。オルノスはその指示に頷く。そして片手で陽光を遮ると、感心するような声を上げた。

「よくもまあ、これだけの屋敷を建てられるほど稼いだもんだ。商才はあっても女心は知らず、か」

屋敷は異邦の国を意識した造りになっており、見たこともないような木々や花が鮮やかだった。鉄格子の門扉から垣間見える庭園には架空の生物を模したと思われる白磁の彫像が点在している。高い塀に囲まれたこの屋敷の主は余所の国の珍しい品々を買い取り、国の中で売るという商売をしていた。オルノスの言うように、人一倍富を築く才能はあったらしい。住居がそれを物語っている。彼には正式な妻はいないが、娘だという幼い少女が一人おり、溺愛しているという噂であった。彼女を誘拐されてはかなわないと考えるのは至極当然のことで、彼女の護衛は屋敷にある値打ち物以上に厳しいものだというのが総長からの情報だった。とても入りたての新入りに任せるような仕事ではなかった。オルノスが問い直したのも無理はない。だが、ジェンスヴェルは仕事を面倒に思って投げたわけではない。仕事についての質問等を済ませた後、オルノスが荷物を取りに一度去った時に指示されたからである。

「仕事自体は任せてしまって構わない。新しく入った彼に、ね」

総長は面白げな表情をしてジェンスヴェルにそう言った。

「何故だ？」

「理由は単純に分ければ二つある。組織に正式に入団する前に、新人に知らせないまま能力を測定することが一つ。そして、もう一つはこの組織のことを外部に漏らすような人物ではないことを確認するため」

「俺が個人で判断していいのか」

「いいや、最終的に判断するのは私だ。しかし、まさか総長自ら仕事を共にするのでは巧妙に偽装する場合もあるんだ。君は人間の腹中には関心がないだろうから、逆に何か分かるかもしれない。不審な点があれば私に報告してくれ」

そういうと、総長は何とも言えない顔をした。すぐにその表情は掻き消え、不動の笑みが浮かぶ。

「とにかく彼は、問題ないぐらいの技量は持ち合わせているだろう。もし手助けが必要そうなら、何より重要なのは依頼をやり遂げることなのだから惜しみなく助力してやってほしい」

## 第16夜

---

夜。間の悪いことに天蓋には満月に近い月が飾られていた。二人は黒に染まる服、そして髪だったがそれがどれほど彼らを見つからなくさせるかはまだ分からない。

屋敷の周りには時折見回りの護衛か、数人の男が洋燈を手に回ってきた。

「行くぞ」

「ああ」

短く告げあって、高い塀の上にもずジェンスヴェルが軽業師のように降り立ち、問題なさそうだと判断すると手を軽く上げた。すぐに、オルノスはその引き締まった身体を音も立てずに飛び乗ってきた。

敷地内へ着地するのではなく、屋敷の最上階の窓塀に移動する。最上階と言っても、いくつかに分かれている屋敷は全て二階までしかない。敷地の広さ故に高くする必要がないのだろう。

護衛の影が見えないことを再度確認し、慎重に窓の鍵を壊すと中へと侵入した。長い廊下は異国の文様が描かれる敷物が敷かれ、自分達の足音に細心の注意を払う必要もない代わりに護衛陣が近づいても分からないという心配があった。しかし、それは普通の泥棒に限った話だ。訓練された二人はある程度人の気配に敏感である。今この時も、周囲には寝ている使用人以外の気配を感じないからこそ廊下を闊歩できているのだ。

二人が忍び込んだのは、使用人が寝泊まりする棟である。諜報を行った者によれば、そこに少女はいるという。つまり、普通に考えて居ないと思われる場所に少女を寝かせることで、あらかじめ夜の不安を払拭しようとしたのだろう。父親にとって苦渋の決断だったのだろう。使用人の部屋は就寝時間になると外から鍵が閉められるようになっているらしい。また少女のいる部屋には夜になると鉄製の板が取り付けられる。

そのため二人は中から少女を盗み出すしかなくなったのだ。窓の下に護衛が待機しているわけでもなく、鉄の板を破るのが不可能というわけでもない。しかし、如何せんだのぐらいの時間がかかるかが知れなかった。また、護衛の巡回は階下を頻繁に通ることになっている。危険は冒せなかった。

ジェンスヴェルの足が止まる。後ろについていたオルノスも即座に反応する。曲がり角の先から明かりがちらつき、小さな囁き声が聞こえてくる。少女がいると思しき部屋はすぐそこにある。おそらく部屋の前を守る護衛の交代か、異常なしの報告だろう。実際に声が鎮まると共に明るさは半減した。

息を殺し、気配を殺し――。

ジェンスヴェルが突然何の合図もなしに目の前から消えた。オルノスは咄嗟に身体に力を込めた。何か不測の事態に彼が気付いたのかと思ったからだ。そして、間をおいて角から様子を窺った。

## 第17夜

---

橙色の光の中に立つ黒服の少年。それはまるで絵画のような一風景だった。

ジェンスヴェルはいつ得たのか、片手に護衛が持っていたと思しき洋燈を提げていた。足元には気絶させられた男が二人柔らかな絨毯の上に伸びている。

内心声を出して鮮やかな手際に感嘆したり、疑問を聞いたりしたかったのだがオルノスはこらえた。仕事の最中にむやみに声を出して失敗を招くほど彼は愚かではない。ジェンスヴェルが洋燈を持っていない方の手で護衛の服の中から居室の鍵を探り出すように指示すると、無言で従った。すぐに見つけ出し、音が響かぬよう慎重に、しかし迅速に鍵穴に差し込み回す。微かな音がしたが、夜の静寂に飲み込まれる。傍らの相方に頷くと、扉を僅かに開いてその身を滑り込ませた。

「試験は合格か？」

唐突に尋ねられて、すぐには答えられずジェンスヴェルは隣を走る男を見た。その両腕には十にもならない人形のような少女が目を閉じて抱えられている。

「さあな」

「これは新人のための試験の仕事だったんじゃないのか？」

「…そうだとでも判断するのは俺ではない」

「つれないな」

オルノスがそう考えるのは自然なことである。しかし、今回の仕事で見られるのは技能以外も含んでいるということをジェンスヴェルは黙殺した。

「とりあえず薬を嗅がせておいたが、依頼主に渡す前に目を覚ますだろう。その後はどうするんだ？まさかずっと眠らせておくわけにもいかないだろ」

「お前が世話をしろ」

ジェンスヴェルが冷たく言い放つと、オルノスは肩をすくめるような仕草を少女を腕に抱いたまま器用にやり遂げた。

「そういうんじゃないかと思ったが…ガキの世話なんてしたことないぜ。しかも女の子だなんて。それでもいいのか？」

「適当にすればいい。ただし、依頼主への引き渡し時に相手が金を出し渋らないようにはしろ」

「…難しい注文だな」

「無理なら眠らせ続ければいい。それが一番効率がいい。ただし少女の体調までは知らん」

オルノスが嗅がせたのは単なる睡眠薬ではあるが、本来ならば睡眠薬の服用は大人がするもので、それを薄めているだけであり、多用すればどんな副作用があるかは分からない。下手をすると昏睡状態に陥る可能性もある。そうなれば依頼主は断固として金を払わないだろう。仕事はまだ終わっていないのだ。

「逃げることはないのがまだ楽だな」

「……」

今度はジェンスヴェルは答えを返さなかった。ただオルノスに抱えられる少女の足をちらと見ただけで顔を前に向けた。

可愛らしい寝間着からはみ出す細い足には、素肌が隠れるほどに包帯が撒かれていた。

## 第17夜

---

少女は目を開けた。木漏れ日が閉じた瞼を刺激し、土と草の匂いを運ぶ風に覚醒を促されたのだ。鳥のさえずる鳴き声が辺りに響く。近くに川があるのか水音も聞こえてくる。

夢だろうかと少女はまだまどろんだままぼんやりと考えた。いつも少女の目を覚ますのは、日の光でもなく、鳥の鳴き声でもなく、部屋の扉を叩く音、そして世話係が自分を呼ぶ声である。少女は暗い部屋の中で一日を始めるのだ。

徐々に意識がはっきりしてくる。少し体がいつもより重い気がした。微かではあるが頭痛がする。喉も乾いていた。少女はのろのろと起き上がり、辺りを見渡した。

森の中だ。目にも鮮やかな緑が日光に照らされ、涼風に吹かれ吊り飾りの水晶のように輝いている。

どうやら夢の中ではないらしい、と気づいた。あまりにも鮮明すぎる。そして体の感覚もはっきりしている。わざわざ頬をつねるようなことはしなかった。

「おい、目を覚ましてるぞ」

男の声が背後から聞こえてきて、少女は飛び上がった。恐る恐る振り返ってみると、長身の男性が朗らかに少女に笑いかけてきた。幾らか恐怖が和らぐ。

「……だれ？」

少女の見たことがない人物だった。いつも無表情か作り笑いをしている使用人たちとは雰囲気完全に異なる。

「俺はオルノス。こっちは相棒のジェンスヴェルだ。これから少しの間よろしくな」

オルノスと名乗った男は腕を上げて少し後ろに手を向ける。そこには、少女より五歳は上であると見られる少年が立っていた。ひどく無表情で、まるで前に父様に見せてもらった蠟人形のようなと思った。その美しさに少女は息を飲んだものだったが、今も前に立つ少年の顔に惹かれていた。

「見とれられてるぞ、ジェンスヴェル」

男のからかうような口調で言い、少女は顔を赤らめて俯いた。ジェンスヴェルという少年は気に留めた様子もなく、口を開いた。冷ややかな、それでいてその静かさにずっと聞いていたいと思うような声で答えた。

「無駄口はほどほどにしろと言っただろう」

そして少女の方へ近づくと、膝をついて少女に問う。

「お前は、あの屋敷の主、ヴェルドニック・アシモラの一人娘フォラリーゼ・アシモラか？」

少女はまだ頬を染めた顔を上げて、ジェンスヴェルを不思議そうな顔で再度見つめた。

「そうよ。お兄さんたちは誰？わたしはどうしてこんなところにいるの？父様は？」

ジェンスヴェルは視線をずらすこともなく、少女を見据えている。その瞳を見て、少女は綺麗だと純粋に感心した。黒い瞳は、漆黒ではなく、光の角度によって紫水晶のような輝きを少女に見せる。綺麗な目だ。

「俺たちは誘拐犯だ」

少女は驚いた表情をすると、顔を伏せた。何を言えばいいのか考えているようだ。しかし、その暇も与えず、再び言葉を発した。

「お前の母親に頼まれてきた」

目の前の少女はそれを聞いて体を震わせた。顔を上げて、今度は複雑な表情でジェンスヴェルを見た。

「お母さんが…？」

「というわけで、お嬢ちゃんは俺達と旅の空だ。別に危害を加える気はないから安心していいぜ」

オルノスがそう言うと、少女フォラリーゼはこくと頷いた。見た目通り大人しい性格のようだ。それには足が動かさないことも多少起因しているのかもしれないが。

「さて、じゃあ出発するかね」

肩を回してオルノスが意気込む。これから彼はフォラリーゼを背負うか抱きかかえるかしなければいけなかった。

「ああ」

ジェンスヴェルも頷いて腰を上げようとした。すると上着の裾を引かれて振り返る。

「何だ？」

特に感情を込めたつもりはないのだが、少女は肩をすくめて口を開いた。

「……お水」

どうやら喉が渴いているらしかった。ジェンスヴェルはすぐに睡眠薬の副作用に思い至る。使用後はひどく咽喉が渴いたり、吐き気がすることがあるという。

「……体の調子はどうだ」

腰に下げていた水入れを差し出しながら尋ねると、フォラリーゼは「たくさん飲んでもいい？」ときいてジェンスヴェルが頷くのを見るとこくこくと急ぐように先ほど汲んできた水を嚥下した。そして息をついて「…美味しい」と顔をほころばせると、質問に答えた。

「ちょっと体がだるい。でも、痛いとか苦しいとかはないから大丈夫だと思う」

「そうか」

三人は休憩を取りつつ、少女の引き取り手の元へ向かっていった。フォラリーゼはほとんど体を動かさないで疲れをこぼすこともほとんどなく、順調に旅は進んだ。

目的の場所へ近づいていることが分かって来ると、ファラリーゼの顔に嬉しさと緊張が走るようになった。ついに明日は親子の感動の対面だという夜、月の浮かぶ空を眺めていた少女は疑問を吐露した。

「どうしてお母さんはわたしのこと、突然引き取りたいと思ったのかな…」

そして、問われたわけでもないのに手を振って慌てて弁解する。

「お母さんが嫌いとかじゃないの、わたしも会いたいと思ってたの。でも父様がお母さんのことは忘れろっていうから、会いに来てくれないんだと思ってた。ジェンスヴェル達に誘拐させるなんてびっくりしたけど、嬉しかった」

「父と母とで呼び方が違うな」

突然ジェンスヴェルが少女の独白を遮って問いかけた。フォラリーゼは一瞬きょとんとした目を彼に向けてから視線を宙に漂わせた。

「父様はそう呼ぶものだって教わったから。お母さんも父様のいるところでは母様って呼ばなければいけなかったけど、二人でいる時は堅苦しくていやだからって、そう呼んでって言ったの」

「…そうか」

途端に興味を失くしたように目を閉じ、背後の幹に背を預けたジェンスヴェルに、フォラリーゼは怪訝な顔を向ける。

「お嬢ちゃんはどっちの方が好きなんだ？」

少女は少し戸惑ったように首を傾げてオルノスの方を見、「分からない」と答えた。

「どっちも好き。でも、父様は仕事で忙しくてあんまり家にいないし、あの家は素敵だったけどあの部屋で寝るのは嫌だった。お母さんはしばらく会ってないけど、綺麗で優しい。二人とも、生まれつき足の悪かったわたしをかわいがってくれてた。でも、だんだん仲が悪くなって…お母さんは今どこにいるの？」

「それは俺達も知らないな、指定された場所はどこかの家じゃなかった」

「…そう」

少女の瞳に憂いが浮かぶ。それはまるで夜空に浮かぶ月が湖面に映されたような輝きを放っていた。

「見えてきたぞ。あれじゃないか？」

日はすでに暮れかかっている。茜色の空の下で、三人は指定された街の入り口が見える場所へ出た。前方を馬車一台分の幅しかない砂利道が町へ伸びていく。フォラリーゼは、街を指さすオルノスの服を強く掴む。

「街へは入らないんだよな？」

確認すると、ジェンスヴェルは頷いた。「ここで待つ。母親が直々に迎えに来るそうだ」

「勝手に会いに行っちゃだめかしら……」

フォラリーゼは興奮の為か、夕日に照らされたせいだけではない、頬の赤さが目立っていた。母親と会った後に下手をすれば熱を出すかもしれない。

「駄目だな。そもそも俺達も彼女のいる場所は知らされていない。下手に動いて行き違いになるよりはここにいた方が遥かにいい」

「そうよね……」と気落ちした風な彼女に、慰めるようにオルノスが言う。

「予定通りに来れたんだから、ちゃんと迎えに来てくれるさ。……ほら、あれじゃないか？」

街の方から一人の女性が歩いてくる。辺りを見回して、街の入り口から外へ出てくる。

「……お母さん！」

少女の口からたまらず飛び出した叫び声に、女性の足が止まる。愛しの娘の姿を認めると、泣きそうな顔をして、こちらに駆け出してくる。

「フォラリーゼ！ああ、やっと会えた……」

オルノスが口笛を吹く。少女の母親とだけあって、整った顔立ちをしている。そして二人はよく似ていた。オルノスの腕から少女を譲り受けると、抱きしめて「良かった」と繰り返す。

ようやく体を話して母親が二人に向き直った時、彼女の眼は赤くなっていた。頭を下げる。

「この子を連れてきてくれてありがとうございます。お礼はこちらです」

腰に下げた布袋をオルノスに渡す。告げられていた金額を確かめると、オルノスはジェンスヴェルに渡した。

「確かに受け取った。…よかったな」

最後の一言はフォラリーゼに向けられたものだ。少女はふわりと微笑んで「ありがとう」と返す。

「……メルヴェールのことはどこで知りました」

今まで黙っていたジェンスヴェルが口を開いた。母親はその見た目の年齢に一瞬目を見張ったが、それについては何も言わずに律儀に答えた。

「だいぶ前に、前の主人が言っているのを聞いて。……主人は何かを頼むつもりだったらしいですが、結局止めたようです。私はそれを思い出してそちらを頼ったという訳です。多分、もう仕事を依頼することはないでしょう」

「……そうですか」

それ以上は何も喋ろうとしなかった。

「では、我々はこれで」

二人が辞退しようとする、母親が「あ、ちょっと待ってください」と言ってもう一つ腰に下げていたやや小さな布袋を差し出す。

「これは？」

「前の主人が、今回のことでもしかすると貴方がたに依頼するかもしれません。その時、断って欲しいのです」

要は口止め料のようなものだろう。しかし、小さくとも依頼である以上受け取らないわけにはいかない。オルノスが目で尋ねると、ジェンスヴェルは少し目を閉じて考え、「…いいでしょう」と袋を受け取った。

「どうもありがとうございました」

頭を下げる親子にオルノスとジェンスヴェルの二人は組織へ帰るため背を向けた。途中でオルノスが振り向くと、母と娘は笑顔に花を咲かせて何かを話していた。頬が緩むオルノスを、ジェンスヴェルが「早くしろ」と叱咤した。

## 第19夜

メルヴェールに娘の誘拐を依頼した母親は、もともと屋敷の主である男の恩師夫妻の一人娘だった。半ば無理矢理に進められた結婚で二人の間にお互いへの愛はほとんどなかったのだろう。しかし、授かった娘を二人とも可愛がった。それによって円満な家庭が築かれるかと思われたが、その可能性は恩師夫妻の突然の死によって打ち碎かれる。恩師に対する義理は果たさずとも良くなった。なら、今の妻は邪魔なだけだ。養う義務もない。普段からの合理的と自負する思考でそう考えた彼は、彼女を屋敷から追い出した。彼女は娘と共に行くならその境遇を甘んじて受け入れたらう。しかし、夫はそれを許さなかった。彼は自分の血を受け継ぐ子供を手元に置いておきたがったのだ。たとえ恋愛感情なしに妻となった女に似ていくと分かっている。彼は子供がでにくい体質であった。今まで手を尽くしても子供ができたことはなかった。少女は間違いなく自分の血を分けた子供であり、彼の一粒種である。彼が手放しに可愛がったのも無理はない。お前にこの足の不自由な娘を養えるのか、身寄りのなくなったお前に。彼はそう言い放った。無茶苦茶を言う、と理解しがたい夫の言葉に彼女は精一杯対抗した。しかし、力関係は明白であり、彼女は涙を吞んで屋敷を離れ、消息を眩ました。それでも、娘のことが忘れられなかったのだろう、夫の言っていた組織を思い出し、必死に連絡手段を探り、ようやく依頼に漕ぎつけたのだ。彼女はもう娘を死んでも離さないだろう。そして、今の彼女には彼女自身が選んだ夫がいる。誠実な夫が彼女自身とその娘の為に尽力して、親子はより早く対面が叶ったのだった。前の夫は、手掛かりの掴みようもなく激昂していることだろう。彼女の案じたようにメルヴェールに奪還を依頼することは十分考えられる。だが、口止めと遠く離れた地への在住で彼が見つめることはそう容易くない。必死に発展させてきた仕事を放り出すことも出来ずに歯噛みするだけで終わるだろう。

恐らく組織設立後初めてであろう後ろ暗くない依頼を果たし、帰途に就いた二人は他愛のない話に興じていた。専ら話しているのはオルノスの方だったが、ジェンスヴェールも一言二言相槌を打っていた。

「ところで、聞きたいと思ってたことがあるんだが」

太陽が姿を消してしばらくすると、雲の群れが流れて夜空をいつの間にか覆っていた。ほとんど暗闇である。仕事をするには絶好の天候だが、終わらせてきたばかりの二人には関係がなかった。ほとんど道のない木々の中を縫って歩いていく。オルノスが少し表情を真面目そうにして言う。

「なんだ」

「お前さんの正体をまだ聞いてねえなと思って」

ジェンスヴェールは瞬きを一つして連れを見る。オルノスは指を組んで腕を頭の後ろに回す。そして口の端を上げて笑い顔になった。

「いや、あの総長さんの正体の方も気になるが……知らぬが仏ってこともあるしな。まあ、魔女だったとしても驚かんが。俺には生憎特別な力はないんでな。魔女の末裔だといっても、祖父だか祖母だかが魔女で戯れに人間と契って子を成したらしいというだけで、純血でもなければ…

…何だったか、後天的って言われるような者でもない。せいぜい体が丈夫なぐらいか。親は早死にしちまったし、詳しいことは何も分からん。聞いておけるなら、と思ってな。仕事中は流石に遠慮したが」

聞かれてもいないのに質問の理由を話し出したが、言い訳めいたところはない。興味本位で聞いているわけでもなさそうだった。「もちろん、下手に漏らすようなことはしないぜ」

ジェンスヴェルは己のことを隠す気は特になかった。しかし、総長レイヴィックが面倒事を嫌ってそうするように言ったのだ。仕事の関係上、人間以上の能力は知れ渡っていたが、過去に起こした事件が噂となって今まで余計な詮索をする者はいなかった。ただ一人を除いては。

オルノスについて、ジェンスヴェル自身は技能的そして組織にとっても問題はないというのが結論だった。彼が一流の役者ならどうかは分からないが、特に欺いているようには感じない。

「レイヴィックに目を付けられたくなければ他には黙っておけ」

「おう」

ジェンスヴェルは正体を示そうとした。だが、それは中断されることになる。何かを察知して口を開く前にさっと顔を上げた。

夜の森に轟音が響き渡った。

## 第19夜

---

轟音が耳を貫き、何が起きたか分からないうちに地面に身体が転がった。木々で休んでいた鳥たちが慌てふためいて飛び立ち、夜の静寂は破られる。

「……おい、ジェンスヴェル！」

事態が呑み込めないまま、叫ぶ。倒れた時に打ち付けた肘が、大したことはないが鈍い痛みを放ち始める。

「ここだ」

首を後ろの方へ捻った。ジェンスヴェルが膝をついて険しい目を彼方へ向けていた。どうやらオルノスを突き倒したのはジェンスヴェル自身だったらしい。オルノスの方からはやや影になるが、どうやら左腕を押さえていた。

「……大したことはない」

オルノスの視線に気づいて、ジェンスヴェルは冷静に言う。しかし、出血はかなりのもので、地面に小さな血の水溜りができ始めている。腹立たしげに傷を眺めて止血しようと体を動かす。オルノスはジェンスヴェルと同じように膝を立ててそれを手伝った。

「……何だ？」

小さな声で疑問を呟く。

「武器は銃だな。それもかなり性能がいい。俺が気を張らなければ気が付かないほど遠距離から撃ってきている。……ここを離れるぞ。音をたてるな」

体を沈めたままで出来る限りの距離を移動する。血痕は続いてしまっているが、暗い中では分かりようがない。

「大丈夫か？」

出血のためにジェンスヴェルの顔色は普段よりもさらに白くなっている。しかし、視線の鋭さは質問を躊躇わせるほどのものだ。心なしか瞳が金色を見せているように感じる。

「じき完全に止まる。それよりも敵だ。近づいてきている。囲まれてはいないようだが、人数は……十人近くいるな」

ジェンスヴェルの言う通り、敵はすでに殺気を隠そうともせず、オルノスにも手に取るようにわかった。まだ彼らがどれほどの戦闘能力を有し、どれ位の武装をしているかは分からない。下手に様子を窺えば今度は脳天に風穴が通るだろう。先程までの鳥たちの騒ぎはすでに止んでいた。再び静けさが辺りを覆っていたが、空気は張りつめていた。

「あの屋敷の主につけられていたってということはないよな」

「ああ。そうであればもっと早くに手を出してくるはずだ。それに屋敷を出てからしばらくしても追ってくる気配はなかった。全く別の関係だと考えた方が筋が通る」

オルノスは頭を強くかいた。悩んだ時などの彼の癖だ。

「どうしたもんかな、銃だけしかないなら近づくが正確な人数も武器の数も分からねえ。……分かるか？」

「断定はできない。長銃を構えているのは三人だが、軽量化したものを隠し持っているならそん

な数は無意味だ。全員合わせて八人か。たった二人の為に随分多く連れてきたな」

二人は小声で対話しつつも距離を縮められないよう、細心の注意を払って後退していた。ジェンスヴェルの言い方に、オルノスは引っ掛かりを感じたが、違和感の正体を掴む前に事態が動いた。

ジェンスヴェルが突如として立ち上がり、後方へ飛んだ。彼のものではない短い悲鳴と、草木がたてる音が続く。迫ってきていた追手が進行を止めるのが分かった。オルノスは少しして木の陰に立ち上がった。

「動くな」

底冷えのする声が暗闇から聞こえてきた。ジェンスヴェルである。どうやら無事に相手を取り押さえたのだろう。あるいはすでに息の根を止めて、追手に制止の声を上げたのかもしれない。

一条の光が差し込んだかと思うと、雲が切れたのか月の光があちこちから地上に降りかかった。追手の姿も良く見えた。ジェンスヴェルの言った通り、八人。ジェンスヴェルが捕えた者も入ると九人。長銃は三丁。見た限りでは腰にも何振りもの短刀や、簡易弓のような武器も下がっている。この分では小銃を全員が携帯していても不思議ではない。過剰なほどの重装備である。一体何を目的に襲ってきたのか。まさか物取りではあるまい。

「やはりお前か」

ジェンスヴェルの声が再び鼓膜を震わせる。相手は組み伏せただけだったらしい。知っている者か、とオルノスは内心驚く。確かに裏稼業は恨みを買うことは多いだろうが、心当たりのあるような者がジェンスヴェルに存在するのだろうかと言しく思った。依頼人にも依頼の対象者にも大した興味を抱かない印象を受けたのだが。

「痛いなあ……さすがジェンスヴェル。僕のことなんかお見通しだったってことかな？」

若い男の声が聞こえてきた。オルノスはその声に聞き覚えがあるような気がして顔をしかめる。

「そろそろ何らかの行動を起こすとは思っていた」

ジェンスヴェルの声が聞こえてくる。二人がいる場所にも月光が歩み寄ってきた。地面に横たわった一人の青年とその喉元に短刀を当てるジェンスヴェル。

「ヴァルス」

名を呼ばれた青年はどこか歪んだ笑みを顔に浮かべた。

## 第20夜

オルノスは青年が誰だか思い出した。出立の直前に会っていたのだ。彼はオルノスがジェンスヴェルと仕事に行くことも分かっていた。荷物を取りに指定されていた仮の自室へ戻ろうと扉を開けた際、廊下の端にあの声の持ち主が立っていた。くすんだやや長めの金髪を後ろでまとめ、優男風な笑い顔をして「君、新入り?」と聞いてきたのだ。「ああ、そうだが」と答えたオルノスに、「じゃあ、ようやく僕にも後輩が出来たってわけだ。ジェンスヴェルは気難しいから頑張ってるね」と笑いかけてきた。その時は軽く礼を言って別れた。オルノスは彼の名前さえ知らなかった。相手も自分の名は知らないだろう。あの時もうすでに今夜のことは計画されていたはずだ。オルノスは運悪く巻添えを喰らったのかもしれない。

「やっぱり無理を言ってあの銃を持ってきて良かった。君に怪我を負わせることができたんだ、開発部を褒めてやらないとね」

得体の知れない青年――ヴァンルスの声に我に返る。

「それにしても……いつから気づいてたんだい?お聞かせ願いたいな。総長も気が付いてたのかな、あんまりへまをしたような覚えはないんだけど。じゃあ、あっちに軍隊派遣しても驚かなかっただろうなあ」

体の動きを封じられ、喉に刃を当てられていても、彼は意に介さずに語る。オルノスには何がどうなっているのかよく理解できなかった。端的に言えば、メルヴェールに所属していたヴァンルスが組織を裏切ったということだろうか。それにしては何か違和感を感じ得なかった。先ほどジェンスヴェルの言動に感じたのとよく似た違和感だ。

「レイヴィックは俺より早く気付いていた。ただ、目的に関しては断定していなかった。俺の方こそ、その目的を聞かせてもらえるんだろうな」

芯まで凍らせるような冷たさを持った声でジェンスヴェルが応じる。何時喉をかき切ってもおかしくない。

軍隊、という単語でヴァンルスは政府の手先だったのだろうか、とオルノスは思案した。それなら違和感の正体にもある程度説明がつくような気がした。八人の男たちは彼の部下か。

「僕の本来の目的は……君だよ、ジェンスヴェル。正確には君と、総長と副総長だ」

ジェンスヴェルは、今度は何も言わなかった。気をよくしたのか、さらにヴァンルスは続ける。

「もともと政府は君たちの組織に目をつけていたんだ。曲者の集まりなら即撲滅しようという話になっていた。そんな連中は厄介でしかないからね。でも、もし一流の腕とそれに見合った自負を持つのであれば、政府の為にも働いてもらおうと考えていた。この前は先走って単独で依頼した馬鹿な奴がいたけどね。ちなみに彼は出張先で行方不明さ。犯行は首相補佐官を狙った集団によるものではないかで見られている。――まあ、とにかく少し様子を見ることにしたんだ、上の方々は。首相とその側近じゃないよ。首相なんて飾り物だ。ただの傀儡。それを操る人が存在するんだ。でも、そんなことは今どうでもいい。元諜報員だった僕に役が回ってきた。どこかで噂を聞いて、入れてもらいたいと組織の扉を叩いた訳さ。本当に、特に問題は起こしてなかったはずなんだけど……君にまわりついたのであって、単なるだと物好きだと他の仲間たちは思っ

いたみたいなんだけどなあ。分かっていたとしても今日まで何もしてこなかったのは助かったよ。政府が今、最も力を入れているのはなんだか分かるかな？ジェンスヴェル」

返答はない。しかし、思い至っていないわけではないだろう。オルノスでさえ彼が何を言わんとしているか見当がついていた。

「”魔女狩り”だ。君たち三人は魔女だろう？違うかい？」

ヴァンルスの声だけが劇場の俳優のように聞こえてくる。追手達も先ほどから武器は降ろさな  
いままで動こうとしない。しかし、それがヴァンルスが状況的には人質のようなものになってい  
るからなのかは判別が出来なかった。

「組織に対して” 魔女狩り” を行うつもりだとでも言いたいのか」

随分久しぶりにジェンスヴェルの声を聞いた、とオルノスは思考の片隅で思った。その声から  
冷たさが去ることはない。

敵の方を時折盗み見ては、この状況を打破すべく策を練るが今のところ良い案は浮かんでい  
ない。隙をついたところで、さすがにあの人数を黙らせるのは困難だった。相手が組織のように  
密かに仕事をこなすべく銃を用いてこなればそれほどの問題ではないが、こんな無人の場所で  
彼らがそんなことを気にするわけがなかった。弾丸の速度には人間は勝てない。魔女であればど  
うなるかは分からないが。しかし、オルノスはヴァンルスの断定するようにジェンスヴェルが魔  
女だということには、さしたる根拠があるわけではないにしても首を捻った。確かに総長が魔女  
であろうというのはオルノスの中でも確信を伴っていた。確信の理由はメルヴェールの拠点が大  
存在する場所にある。昼夜逆転の世界。あんなものは到底人間には作り出せない。まず魔女の力だ  
と思うのが当然だ。副総長という人には一度も会っていない為、何ということもできない。だが  
、ジェンスヴェルには何かが欠けているような気がした。それがなんなのか、オルノスには説明  
できなかった。彼に流れる微かな魔女の血脈がそう思わせるのかもしれない。

「ジェンスヴェル」

ヴァンルスがようやく聞こえるくらいの声で、しかしはっきりした口調で囁いた。

「僕が君に組織からの招集を伝えに行った時のことは覚えているだろう？」

オルノスの知らない、過去に話が遡る。

「あの時、君に会う前に僕は重傷を負った。そしてそのすぐ後に君は街からの依頼であの納屋へ  
とやって来た」

口を挟む者も体を動かす者もない。ヴァンルスの独白だけが聞こえる。

「僕が、そして君が対峙したのはれっきとした魔女だった。人間一人では傷付けることはおろか  
、自分の身を守るのでさえ精一杯だった。殺人衝動に突き動かされた魔女に、人間ではそう簡単  
に太刀打ちできない。――でも、ジェンスヴェル――君は打ち勝ったね。さすがに無傷というわ  
けではなかったけど……それが君が魔女だという紛れもない証拠だよ」

「長話はいい。結局” 魔女狩り” を行うということだろう」

ジェンスヴェルが遮る。ヴァンルスは笑みを深くした。

「早計してもらっては困るよ、ジェンスヴェル。僕は提案をしに来たんだから」

不可解な空気が伝わったのか、口を開いて説明を始める。

「政府はね、長年魔女の存在に頭を抱えていた。” 魔女狩り” だって本当に苦肉の策だったんだ  
。それでも十分な成果は得られていない。魔女を止められるのは魔女だけだ。もう、僕の言いた  
いことは大体分かるだろう？」

ジェンスヴェルはまた沈黙する。それを肯定と受け取ったのか、ヴァンルスは意気揚々と続

ける。

「君らが三人で一斉にかかれば、さすがに魔女一人では勝てないはずだ。だって君一人でも何とか倒せてしまえるぐらいなんだから。しかも殺人衝動は他の個体と比べてかなり低いみたいだ。――政府からの協力要請だよ。もちろんただでとは言わない。特に悪い話でもないと思うよ。今までとやってることはそう変わらないんだから。同士討ちに拘るわけでもないだろう?」

「俺たちがその提案を潔く受け入れると思うのか。先に攻撃をしておいて随分と都合のいい話だ」

「もちろん、君に怪我させたことは謝るよ。でも、どうしても性能を試しておきたかった。だから急所は外して狙ったんだ。魔女に対応すべく、日夜殺傷技術の向上が図られているんだ。組織の方には軍隊を送ったけど、まずは交渉をするつもりだ。下手に対抗されても困るから、っていうだけの単なる飾りだよ。君達はこういう仕事を取り扱っているんだから、政府に認められていれば、随分と仕事がしやすくなると思うんだけど」

雲が流れ、青白い月光は照らす箇所を刻々と変えていく。

短い静けさを破ったのは、ジェンスヴェルの方だった。

「答える必要もないことだな」

何かを言おうとヴァンルスが身じろぐが、今度はそれは叶わなかった。ジェンスヴェルがさらに首へ短刀を近づけたからだ。首に巻かれた布に刃が軽く沈む。

「俺達は、政府の犬などになる気はない。これは組織全体の答えだ」

そして短刀を少し持ち上げ、構える。

「俺達の前から消え去れ」

政府の使者の首から血飛沫が吹くことは――なかった。代わりに乾いた音が、夜を切り裂く。

「！」

ジェンスヴェルがヴァンルスの上から、瞬時に身体を離れた。ヴァンルスの手には、いつの間にか取り出していた小銃が細い煙を一筋宙に漂わせていた。

「うん、やっぱりそう簡単には仕留められないな。全員でかかるしかなさそう。それにしても、君は本当に一流だね、惚れ惚れするよ」

真意を掴みかねるヴァンルスは、小銃を構えるのとは逆の手で肩を片手で抑えながら立ち上がった。僅かに出血しているようだ。ジェンスヴェルが発砲される前に、離れる寸前に傷を負わせたのだろう。首に巻いた布が傷付けられ、間から鈍色がのぞく。

「すぐに気付いていたんだろう？これは錫に他の軽い金属を混ぜ合わせて作った軽量で強固な鎧なんだ。部下たちも皆身につけているよ。それでもその継ぎ目を見抜いてきたのは素晴らしいね。……思い直す気はないのかい？」

相対するジェンスヴェルは、今度は傷を負わなかったらしい。顔をやや下に向けているため、影になって顔色は見られなかったが、ヴァンルスの口調からして彼の反撃は空振りに終わったのだろう。手にした短刀からは紅い滴が途切れ途切れに落ちる。

「二度は言わない」

短く宣言する。

「残念だなあ」

しかし、オルノスも入ったばかりとはいえ、その提案に応じることがいかに愚かなことか分かっていた。傭兵時代の経験からも断るのが最善だと踏んでいる。政府に迎え入れられ、最上級の待遇をされたとしても、所詮彼らの言いなりとなって魔女の撲滅、政府の公にはできない依頼を引き受けることになるのだ。あるいはこの先戦争が起きた場合は戦地に先鋭部隊としてまず送り込まれるだろう。途中で縁を切ることは不可能だ。そんなことを仄かにでも匂わせれば、即始末されるだろう。それでも魔女が三人も集っているのであればどうかわからなかったが、わざわざそんな面倒事を押しつけられると少し考えれば分かるようなことに乗る人間は、少なくとも今の状態に不満のない裏稼業者においては皆無だろう。また、命惜しさに要求を呑む必要のない力を有しているのであれば。オルノスの印象としては、メルヴェールは特に組織を拡大しようとも、依頼を無理に多く受けようともしていないように感じた。総長レイヴィックも、ジェンスヴェルの言うように断るだろう。たとえ軍隊が動いたとしても、あの世界の主は魔女だ。おそらく、勝ち目はない。にも関わらず政府が動いたのは、ヴァンルスの言う通り、魔女に関する問題が差し迫った状況にあるからだろうか。

「命乞いをするなら今のうちだよ」

だが、現状では確実に二人とも始末される。ジェンスヴェルにどれほどの力が秘められているのか定かではないが、片腕に傷を負った状態ではそれも当てにできるかどうか分からない。相手は人数分の銃を用意しているかもしれないのだ。下手にかかれば、体中に穴が開けられて終わりだ。

「……本当に残念だよ。君とはまた一緒に仕事がしたかった」

ヴァンルスが目をこちらに向ける。オルノスを一瞥すると、先日と同じような笑いを浮かべた。ひどく、作り物めいた笑みだと今気が付いた。それから彼は、部下へ目くばせをした。音こそ立てなかったが、彼らが全員大小の銃を構え、射殺の準備に入ったのが見えた。

「さようなら、ジェンスー」

ヴァンルスの死刑宣告の声は、途中で途切れた。なぜなら、ジェンスヴェルがゆっくりと顔を上げたからだ。

その眼は――夜空の王と同じ輝きを放っていた。

その瞳は、豹のような輝きを放っている。オルノスは見たこともない高貴な獣のようだと感じた。暗闇の中に光を放つ双眸は揺るぐことなく視線を前方に向けていた。

息を飲む音が聞こえてきた。後ろの男達だ。それは美しさに魅了されたものとも、人間とは飽きたかに違う生き物を前にしての畏怖からきたものとも思われた。そして、彼の目前に立つヴァンルスはより近くからその瞳を見、捕らわれて動けないかのように見えた。

しかし、訓練された人間の理性は見えない糸を断ち切った。目をそらした司令官が眼光鋭く部下に指示すると、呪縛から振り払われた殺意が場を満たす。素早い動きでヴァンルスが手を上げると、銃声が鼓膜を耳鳴りするほどに震わせる。爆音に思わず瞼が閉じる。

「ジェンスヴェル！」

目を開いて叫ぶと、こちらにも銃弾が襲ってきた。すぐに木の陰に回るが、銃弾の数が多いうゑに大した太さのない木の幹から身体がはみ出し、すぐにあちこちに銃創ができる。どれも大したことはないが、ジェンスヴェルの無事も確認できないほどだった。

だが銃声が一旦止むと同時にくぐもった悲鳴が耳に届いた。一つ、もう一つ。そして再び銃声。ヴァンルスの指図も聞こえてくる。どうやらジェンスヴェルはあの銃幕を辛くも逃れたらしい。それならば自分への注意もなくなっただろうと幹から少し顔を出した。

銃声が断続的に続く中、倒れる者がいる。一瞬肝が冷えたが、追手のうちの一人だった。

月光だけが照らす森の中に金色の光が瞬いた。

また一人の男が地に伏す。全く動かなくなった身体からはゆっくりと血が滲み出していた。

すでに追手の半数が美しき獣の手にかかったことになる。

「距離をとれ！攻撃の隙を与えるな！」

焦り出したヴァンルスの声に押されるように銃声が鳴る。弾が切れると即座に薬莢を入れ替える。よほど訓練したのだろう。しかし、彼らの間には焦りと恐れが支配しつつあった。何が起きているのか完全に把握できていないのだ。いくら銃を放っても、敵はひるまない。それどころか、最初の一発以外当たっていないのだ。

「四人で背を合わせて撃て！」

指令が飛んでくる。離れていた男たちはその指示に駆け出す。オルノスも、その瞬間を見逃さなかった。地面を蹴ると、一番近くにいた男の背後に迫る。気付いた男が振り向きざまに銃を向けるが、銃弾が発射される前に銃身をはじいた。弾は地面を穿つ。飛び散った土が地面に戻る前に、オルノスは用意していた愛刀、黒塗りの両刃刀を一閃していた。保護されていない頭部を切断する。別の者からの反撃がきたが、もはや己の体から血が飛ぶことはなかった。移動して事切れた男をそちらに投げるが、かわされて銃口を向けられる。だが、今度は銃身を上に無理矢理向けさせる。長い足がそれを可能にした。自身が戦う横でまた一人男が倒れるのが分かった。最後の一人は逃げ出そうと何発か撃った後、背を向ける。そして獣が牙を剥く。

――刹那の闘いの後。

蒼い顔をしたヴァンルスは自分より低いジェンスヴェルに首を掴まれ、足は宙を浮いていた。

予想以上の力によって体はまともに動かさない。徐々に頭に血が溜まり、顔が赤くなっていく。首を覆う金板は変形し、気道を塞ぐ。言いたいことがあるのか、それとも命乞いか、口を開くが風に似た音が鳴るだけで言葉にはならない。最初はまだ薄笑いを浮かべていたが、今は苦しげに顔を歪め、その表情には恐怖が見え隠れしていた。

何も言わずに、ジェンスヴェルはさらに力を込めた。政府の使者は最期の力を振り絞って抵抗しようとするが、遅かった。早かろうとも無駄ではあっただろうが。

鈍い音がして、潰された咽喉から発された断末魔は長くは続かず、使者は頭を不自然に垂れた

。

血の泡を吐き出す骸は手から滑り落ちる。見開いた目は閉じられることはなかった。

傍らに立っていたオルノスは予想外の戦闘が終わったことに対する深い息をつく。銃弾のかすった身体のアちこちが痛み出す。

二人が多数に勝てたのは、敵が銃に頼っていたからでもあった。ジェンスヴェルに一発当てられたことでその威力に自信を持ったのだろう。結果として腰に吊るしていた武器類を用いることなく命を終えることになった。もちろん、それらを使ってもジェンスヴェルの奇襲は避けられなかっただろう。しかし、ある程度闘いを長引かせることはできたかもしれない。

銃はその作り手がまだ少数であるため、発展途上の武器である。ヴァンルスも開発部という言葉を使っていた。その殺傷能力は史上最も高く、職人をどれだけ抱えられるか、あるいはどれだけの人数を訓練できるかがそのまま国力となる。現在、世界の大国は両方の量産に全力を注いでいるといってもいい。ただ、組織では完全な消音が成されない限りは使用されることはないだろう。発射音が大きすぎて暗殺にはとても向かないからだ。

だが、戦闘経験が長い者ほどすぐに分かるが、銃にもそのほかの武器同様欠点がある。それは、攻撃の軌跡が直線であり、使い手の意志が十分に及ばないということだ。それ故に接近戦には向かない。銃身が長いほど威力は高まるが、相手に一定の境界線内に踏み込まれればたちまち不利になる。多少性能は落ちるが長銃よりは至近で距離で使える小銃でも、少し手先を誤れば銃弾はあらぬ方向へ真っ直ぐに飛ぶ。乱れた攻撃の中で、ジェンスヴェルに当てられることは至難の業だっただろう。

「死体はどうする?全員埋める体力はさすがに……」

ないぜ、と言いかけて、オルノスはジェンスヴェルの様子がおかしいことに気づいた。いや、今までも何かを超越したような風ではあった。しかし嵐が去った今、また違った感じが静かに彼を覆っている。

「大丈夫か?」

怪我はもう負わなかったはずだが、と顔を覗き込む。ジェンスヴェルの瞳が未だ輝きを放っていた。意識ははっきりしているらしい。金色の眼を動かし、沈黙したオルノスを見て口を開く。

「俺の正体が何か、知りたいと言ったな」

確かにオルノスは、出発時に、そして襲われる前にそのことを話題にしていた。

「ああ」

「――俺の正体は吸血鬼だ」

聞きなれない単語にオルノスは瞬きをしただけだった。

「作り話にあるようなものと思っただけなのか」

「そう思いたければそう思うがいい。していることはそう変わらない」

言い放った後で、魔女の末裔に事実を説明した。魔女の親戚のような者で、その存在は非常に少ないこと。高い身体能力と生命力の代償として――魔女とは決定的に異なる点――魔力が常に減少し続けるために万物の中では量が多い人間の魔力を血から補給しなければならないこと。やむを得ない時には総長から血を受けること。口を挟まず耳を傾けていたオルノスは最後まで聞き

終わると嘆息した。

「……なるほどな。それでこんな仕事をその年でしているのか」

「正確な年齢は知らない。記憶が茫漠としていて、年齢相応に生きてきたのか、倍近く生きてきたのか定かでない。運悪く”魔女狩り”に遭って負傷したところを副総長に拾われただけのことだ」

オルノスは気になっていたことを問う。ジェンスヴェルの瞳を指して訊ねる。

「眼が金色になるのは何故なんだ？」

ジェンスヴェルは目に手を当て、少し考え込んだ後に見解を述べた。

「さあな。魔力が足りなかったり、危機に陥った時はそうなるんじゃないのか。これまで同類に会ったことがないから大したことは分からないが」

「じゃあ、今は足りてないのか。魔力が」

「そうだ。仕事に行く前に血を得たが、殺し以外の仕事に日数をかけた上にこの面倒事だ、足りなくなって当然だな」

その先は口を閉ざした。オルノスも分かっていた。彼がこれから行わなければいけないことを。

だが――。

「どれぐらい必要なんだ？」

そう訊ねたオルノスの脳裏には、ある言葉が甦ってきていた。吸血鬼という正体、そしてその全貌を知って初めて意味が理解できる言葉だ。一方、何故そんなことを聞くのかと不可解そうな顔をしつつもジェンスヴェルは答えた。

「さあな。人が良いとは言っても、個人差がある。必要な魔力が得られればそうと分かるというだけで、明確な量は知らん。おそらく貧血で動けないぐらいだろう。無駄に摂取するようなことはない」

表情を微塵も動かさずに淡々としたものだ。

「……ジェンスヴェル、俺の血はいらねえか？」

だが、この提案には些か驚いたように目を瞬かせた。そう見えただけかも知れないが。

「お前さん、わざわざ自分を襲ってきたような奴らの血を飲むことはないだろ。それに俺だったら他の奴よりも、その魔力が高いかもしれないだろ。少量で済むなら、やるぜ」

今度こそ、ジェンスヴェルの眉が顰められた。

「なにか理由があるのか。血を吸われたいなどと言うやつは初めて見たが」

「いや、お前さんが嫌なら無理強いするつもりはないぜ。単に総長さんに言われたのを思い出したただけだ。『丁度いいかもしれない』って言ってただろ、あの人。……さらに言えば、俺の頭を冷やしてもらいたいのもあるかもな。少し魔女の血が流れているせいかもしれないが、人を殺すと、その後しばらく体が熱を持ったままで興奮状態になるんだ。意識に問題ないがな。まあ、そういうことだ、俺はどっちでも構わないぜ」

逡巡か、回答には少しの間があった。今まで好んで自分の血を与えるなどと言われたのは初めてで無理もなかったが、特に断る理由もない。ジェンスヴェルは元の無表情に戻って頷いた。

「いいだろう。お前の血をもらう」

そして、魔女の末裔が負った傷に吸血鬼の唇が触れた――。

再び帰途。オルノスが雑談を喋り、ジェンスヴェルが相槌を打ったり、首を振ったりして答える。もう間もなくメルヴェールのある世界への入り口が見えてくるだろう。

「なあ、俺の血はどうだった？」

気楽に尋ねる相方に、呆れながら評価を言い渡す。

「悪くはなかったとだけ言っておこう」



## The Last Night

---

風がざわめく。いつもここは風が吹いているのだろうか、どうでもよいことを考える。どこかで花が咲いているのか、甘い香りが混じっている。

夜明け間近の世界は霧に覆われていた。風に揺らいで視界が遮られるということはないが、霞がかったそれはまるで夢の中にいるかのように錯覚させる。徐々に白くなる空の下、前を進む黒でさえ滲んで見える。

『――お帰りなさい』

どこかから綺麗な声が聞こえてきて足を止める。目の前の気配も止まったのが伝わってくる。

「……軍隊はどうした？ローゼ」

女性の名前にオルノスは戸惑った。組織に身を置いてまだ幾ばくもないが、女性がいるとは思わなかったのだ。だが、聞こえてくる透明な声音は間違いなく女性のものだ。年齢は掴みかねる。

『まあ、無粋ね。ジェンスヴェル』

鈴を転がすような笑い声がどこからともなく聞こえてくる。その方向が全く掴めないのも不思議だった。相棒は分かって会話をしているのだろうか。

『帰ってきていきなりそんな言葉、嫌だわ。もう少し気の利いた言葉が欲しいのよ？』

「そんなものは後ろの奴にでも注文しろ」

ジェンスヴェルがそういった途端に、霧が動きを速めた。まるで意志を持っているかのように。

「もう、可愛くないわね。せっかく迎えに来てあげたのに」

「誰も頼んでなどいないだろう」

霧が収束して少女が形作られた――ようにオルノスは感じた。不意に前方に小柄な少女が姿を現した。

見とれるような少女だった。黙して椅子に座っていれば、人形と勘違いするほどの造形美である。先だっけの依頼の少女も可愛らしかったが、ジェンスヴェルに微笑むこの少女は、何かを超越したかのような美しさを有していた。決して言い過ぎではない、とオルノスは思った。長い金髪は、まだ弱い朝日を浴びて灰かに光を放っている。白い肌は透き通るようで、身に纏う黒を基調とした高貴な服がそれを際立たせている。対照的に唇は、紅を塗っているわけでもなかりうに真紅の色で、微笑みを浮かべている。そして、瞳を見た時、オルノスは動けなかった。

満月のような金色の瞳が、嬉しそうに輝きを放っている。それなのに何故か、オルノスは威圧を感じた。本能的な恐怖がじわりと浮かぶ。

「貴方がオルノスね？はじめまして。私はローゼ。メルヴェールの副総長よ。――怯えなくてもいいわ。何もしないから安心して頂戴？」

いきなり声を掛けられて、オルノスは不覚にも体を一瞬震わせた。自分の身体の反応に驚く。今までこのようなことはなかった。それ以上に、怯えなど、何時ぶりの感覚か。

「魔女同士は会うと、無意識に相手の力を読み取るから……ほんの少しの血でも本能は抜けないみたいね。無理もないわ。普通の魔女ならどうか分からないけれど、私は血が濃すぎてどうしよ

うもないのよね。お願いだから怖がらないでね？」

そう言いながらも笑みの絶えない彼女に慣れるのは少し時間がかかりそうだった。だが、オルノスはもう落ち着きを取り戻していた。ジェンスヴェルが相も変わらずの表情をしていたからかもしれない。

「……大丈夫です。魔女ローゼ。貴女がこの世界の主ですね？」

ローゼの言葉がなくとも、すぐにオルノスは正体が分かっていた。この超然とした少女が、自分と近い——そう言うことも恐れ多い気がしたが——存在であることを。

「ええ、そうよ。何か知りたいことがあればお答えするわ。ジェンスヴェルが来てから何年かぶりの同士ですもの。嬉しいわ。あ、ジェンスヴェル、軍隊の方は心配いらないわ。だって彼らはこの世界から拒絶されたんですもの。密告者のご忠言で入ってこれはしたみたいだけれど、この世界を一目見た次の瞬間には消滅していたと思うわ。だけれど、そのうち入り口か入り方は変えることになるでしょうね。面倒事をごめんだもの」

くすくすと笑う少女にジェンスヴェルが口を開く。

「密告者とその仲間はこちらでも始末した」

「そう。二人とも服が破けているからそうじゃないかと思ったわ。この件については、後はレイヴィックにね。二人ともついていらっしゃい」

くるりと背を向け、軽やかな足取りで先を歩き始める。オルノスは微かな吐息を吐いた。どうも威圧感からは逃れられないのだ。

「俺には分からない感覚だな」

しかし、ジェンスヴェルには感付かれていたらしい。

「どこかしら違う所があるんじゃないかねえか？俺もこんなのは初めてだが、正直鳥肌が立ってるぜ」

「魔力の質かもしれんな。お前の血もかなり少なく済んだ」

魔力の補給は大した時間も掛からずに終わった。「もういいのか」とオルノスが聞いたぐら이다。

「……彼女の言う通り、いろいろ聞いてみることにするか」

「そうしろ」

そして連れ立って歩き出した二人に、花香る風が吹きかけた。

——間もなく、この世界は黎明を迎える。

月の光だけ降り注げ

破壊的な太陽の矢などいらぬ

死人の肌の如く青白い輝きを浴びせよ

舞い落ちる月の欠片の下

夜空の王が見守る中

我は闇に

影を従えて

罪を犯そう

Thank you for your reading. See you again.

The night king always looks your crime.